公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2019

１　里野中山城跡　曲輪全景（真上上空から：モザイク写真）

２　新宮城下町遺跡の出土遺物

巻頭写真２

３　国宝　根来寺多宝塔（大塔）　竣工

４　重要文化財　旧西村家住宅主屋　竣工

５　重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅主屋　竣工

６　重要文化財　東照宮　本殿、石の間、拝殿及び唐門　竣工

巻頭写真４

７　県指定文化財　阿弥陀寺大師堂　竣工

８　国指定史跡　浜の宮王子跡　熊野三所大神社本殿　竣工

目　次

平成31・令和元（2019）年度　受託業務一覧 …… 2
平成31・令和元（2019）年度　受託業務所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等

田屋遺跡の第４次発掘調査 …… 4
且来Ｖ遺跡の発掘調査 …… 5
天路山城跡の発掘調査及び出土遺物等整理 …… 6
里野中山城跡の発掘調査 …… 7
結城城跡の発掘調査 …… 8
和歌山城跡の第１次出土遺物等整理 …… 9
和田岩坪遺跡の出土遺物等整理 …… 10
田屋遺跡の第１次出土遺物等整理 …… 11
立野遺跡の出土遺物等整理 …… 11
道の川集落跡（仮称）の発掘調査及び出土遺物等整理 …… 12
新宮城下町遺跡の第３次出土遺物等整理 …… 13
根来寺遺跡の発掘調査支援 …… 14
和歌山城跡の第39次発掘調査支援 …… 15
青木Ｉ遺跡の発掘調査支援 …… 16
湯浅町内遺跡の報告書作成支援 …… 16
竜松山城跡の発掘調査等支援 …… 17
天路山城跡の発掘調査等支援 …… 18
新宮城下町遺跡の出土遺物等整理支援 …… 18

文化財建造物の保存修理技術指導

国宝　根来寺多宝塔（大塔）の
　　保存修理（災害復旧・一般） …… 19
重要文化財　旧西村家住宅主屋ほか二棟の保存修理 …… 20
重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅主屋
　　及び米蔵の保存修理 …… 21
重要文化財　濱口家住宅南米蔵ほか５棟の
　　保存修理（災害復旧） …… 22
重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか３棟の
　　保存修理（災害復旧） …… 24
重要文化財　東照宮本殿、石の間、拝殿及び唐門の
　　保存修理（災害復旧・一般） …… 25
登録有形文化財　郭家住宅図面作成等 …… 26
国指定史跡　浜の宮王子跡の保存整備
　　～熊野三所大神社本殿の保存修理～ …… 27
国指定史跡　旧名手宿本陣整備事業 名手役所
　　主屋及び離れ・蔵復旧整備　その１工事 …… 28
県指定文化財　護国院開山堂ほかの保存修理 …… 29
県指定文化財　阿弥陀寺大師堂の保存修理 …… 30
県指定名勝　藤崎弁天弁天堂の保存修理基本設計 …… 31
景観重要建造物　大福院本堂の保存修理 …… 32
熊野那智大社境内施設整備事業技術支援
　　熊野那智大社長生殿・手水舎等の保存修理 …… 33
那智の田楽伝承・活用等事業に係る設計監理
　　田楽舞台の新調 …… 33

関連研究・資料紹介

南海道「兄山（背山）越え」ルートについて …… 34
天路山城跡「土居」と周辺の石塔類について …… 35

普及啓発活動

平成31・令和元（2019）年度の普及啓発活動 …… 37

文化財センター概要

平成31・令和元（2019）年度概要 …… 41

巻 頭 写 真

巻頭写真１－１　里野中山城跡　曲輪全景（真上上空から：モザイク写真）
　　２　新宮城下町遺跡の出土遺物
巻頭写真２－３　国宝　根来寺多宝塔（大塔）　竣工
　　４　重要文化財　旧西村家住宅主屋　竣工
巻頭写真３－５　重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅主屋　竣工
　　６　重要文化財　東照宮　本殿、石の間、拝殿及び唐門　竣工
巻頭写真４－７　県指定文化財　阿弥陀寺大師堂　竣工
　　８　国指定史跡　浜の宮王子跡　熊野三所大神社本殿　竣工

例 言

1　本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが平成 31・令和元年度受託業務として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等業務、文化財建造物の保存修理技術指導業務・調査・技術支援等、及び普及啓発活動の成果をまとめたものである。

2　掲載した地図は、和歌山県教育庁生涯学習局　文化遺産課が発行する「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」『和歌山県地理情報システム』https://www2.wagmap.jp/wakayamaken/Portal（和歌山県企画部企画政策局情報政策課）（地図は、国土地理院発行の数値地図）の複製を一部加筆し引用した。

3　掲載写真・図面は、基本的に事業の実施に伴い撮影・作成したものであり、出典が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。

4　原稿執筆は職員が分担して行い、各文末に執筆者名を付した。編集・組版及び概要データ作成は、多井忠嗣・土井孝之が担当した。

平成31・令和元(2019)年度　公益財団法人和歌山県文化財センター受託業務一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等業務

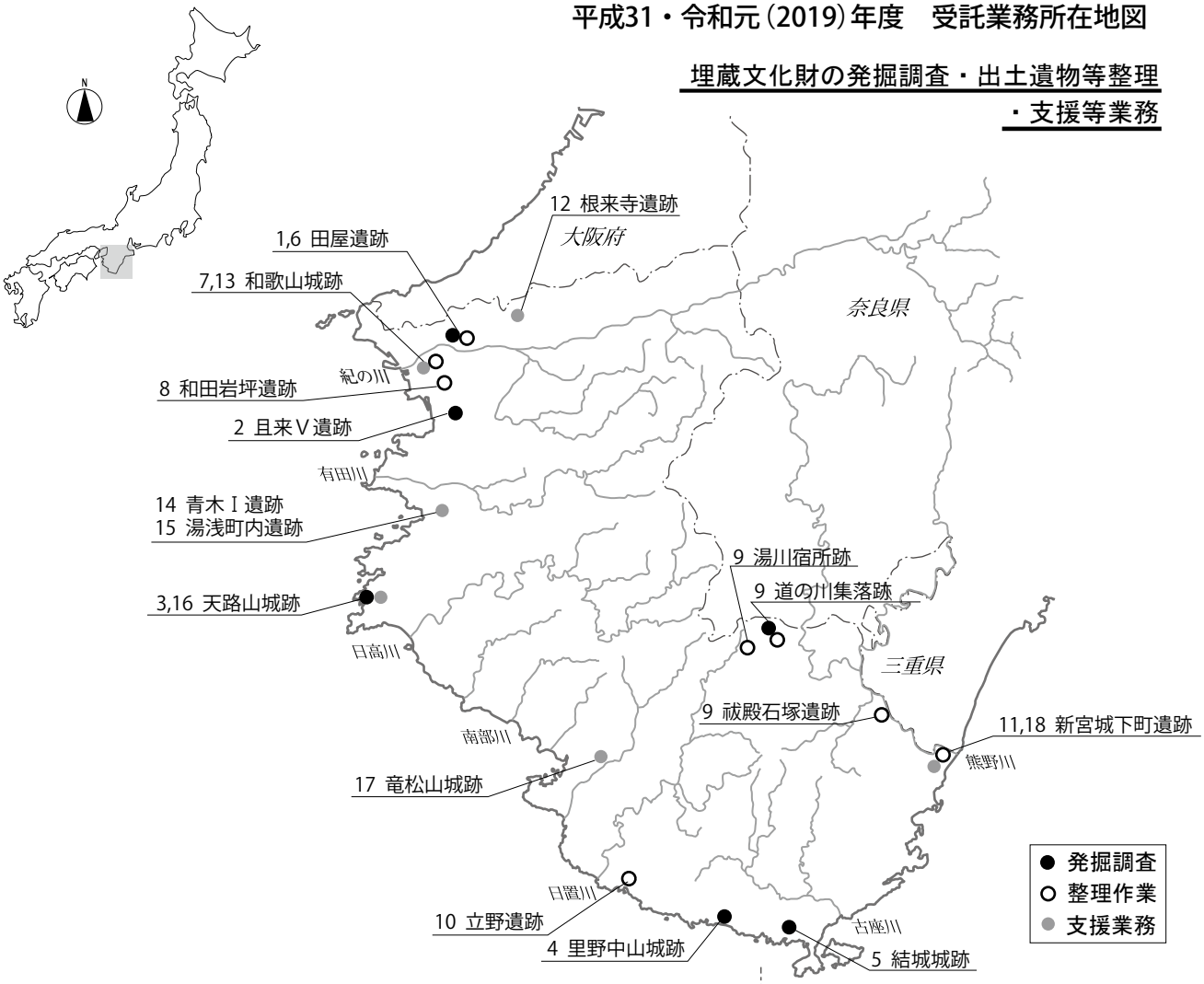
	受託業務の名称	所在地	契約期間	調査面積	委託機関等
1	県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡第４次発掘調査業務	和歌山市田屋	2019.03.12 ～ 2019.07.31	1,049.3㎡	和歌山県
2	秋月海南線道路改良事業に伴う且来Ｖ遺跡発掘調査委託業務	海南市且来	2020.01.09 ～ 2020.03.23	155㎡	和歌山県
3	天路山城跡本発掘調査等業務委託	日高郡日高町比井	2019.08.21 ～ 2020.01.27	360㎡	日高町
4	一般国道４２号すさみ串本道路埋蔵文化財発掘調査業務	西牟婁郡すさみ町里野	2019.06.28 ～ 2020.03.31	91㎡	国土交通省近畿地方整備局
5		東牟婁郡串本町有田上		1,745.9㎡	
6	紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡第１次出土遺物等整理業務	和歌山市田屋、小豆島	2019.11.01 ～ 2020.03.23	—	和歌山県
7	和歌山県立医科大学薬学部新築に伴う和歌山城跡第１次出土遺物等整理業務	和歌山市七番丁、九番丁	2019.04.08 ～ 2020.0327	—	和歌山県
8	平成 31 年度　和歌山平野農地防災事業　名草排水機場建設工事に伴う和田岩坪遺跡出土遺物等整理業務	和歌山市和田	2019.05.07 ～ 2020.02.28	—	近畿農政局
9	熊野古道見どころ整備事業に伴う道の川集落跡 (仮称) 発掘調査等業務	田辺市本宮町三越 2569 内 1 号	2019.09.24 ～ 2020.03.31	44㎡	和歌山県
10	すさみ町集合住宅建設に伴う立野遺跡出土遺物等整理業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2020.01.15 ～ 2020.03.31	—	すさみ町
11	新宮城下町遺跡第３次出土遺物等整理業務	新宮市下本町	2019.07.17 ～ 2020.03.31	—	新宮市
12	平成 31(2019) 年度旧県会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡発掘調査支援業務	岩出市根来	2019.04.09 ～ 2020.03.31	—	和歌山県
13	和歌山城跡第 39 次発掘調査に係る発掘支援業務委託	和歌山市九番丁 11 番	2019.07.22 ～ 2019.11.30	1,364.7㎡	公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団
14	青木Ⅰ遺跡発掘調査等支援業務	有田郡湯浅町青木	2019.09.09 ～ 2020.02.29	1,384.2㎡	湯浅町
15	湯浅町内遺跡報告書作成支援業務	有田郡湯浅町青木	2019.08.01 ～ 2020.03.31	—	湯浅町
16	天路山城跡発掘調査等支援業務	日高郡日高町比井	2019.05.10 ～ 2019.05.31	46.25㎡	日高町
17	竜松山城跡発掘調査等支援業務	西牟婁郡上富田町	2019.08.01 ～ 2020.03.31	—	上富田町
18	新宮城下町遺跡出土遺物等整理支援業務 (1)	新宮市下本町	2019.05.11 ～ 2019.07.31	—	新宮市

文化財建造物の保存修理技術指導業務等

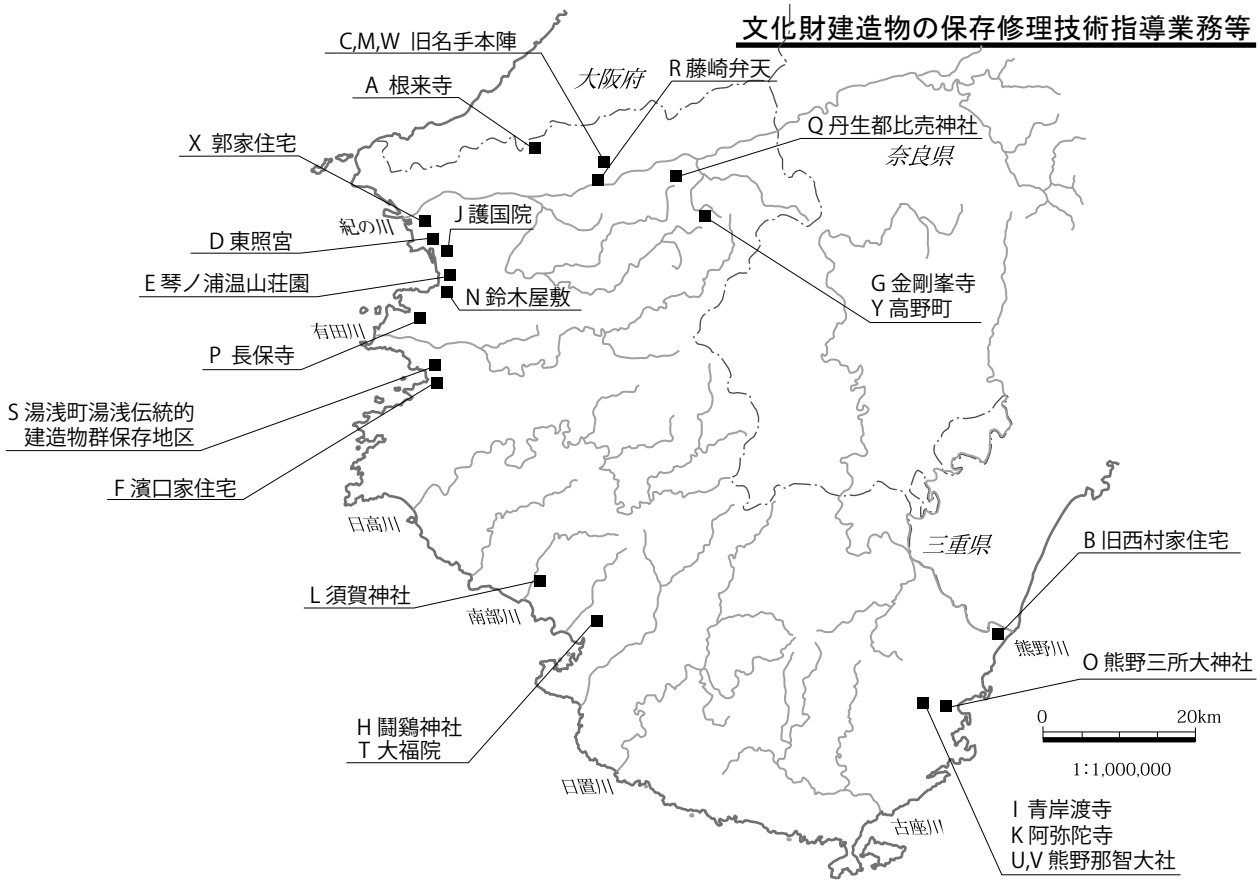
	受託業務の名称	所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	国宝　根来寺多宝塔（大塔）の保存修理（災害復旧・一般）技術指導	岩出市根来	2019.02.15 ～ 2019.09.30	1 棟	宗教法人 新義真言宗総本山根来寺
B	重要文化財　旧西村家住宅主屋ほか二棟の保存修理技術指導	新宮市新宮	2019.04.01 ～ 2019.09.30	3 棟	新宮市
C	重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅主屋の保存修理実施設計	紀の川市名手市場	2019.04.03 ～ 2019.09.30	1 棟	紀の川市
C-2	重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅主屋屋根工事監理	紀の川市名手市場	2019.06.13 ～ 2019.12.20	1 棟	紀の川市
D	重要文化財　東照宮本殿、石の間、拝殿及び唐門の保存修理（災害復旧・一般）技術指導	和歌山市和歌浦西	2019.02.15 ～ 2020.03.31	2 棟	宗教法人　東照宮
E	重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか３棟の保存修理 (災害復旧) 技術指導	海南市船尾	2019.02.15 ～ 2019.06.30	4 棟	公益財団法人 琴ノ浦温山荘園
F	重要文化財　濱口家住宅南米蔵ほか５棟の保存修理 (災害復旧) 技術指導	有田郡広川町広	2019.02.15 ～ 2020.03.31	6 棟	東濱植林株式会社
G	重要文化財　金剛峯寺奥院経蔵の保存修理基本設計	伊都郡高野町高野山	2019.06.11 ～ 2019.09.30	1 棟	公益財団法人 高野山文化財保存会
H	重要文化財　鬪雞神社本殿ほか１棟の保存修理基本設計	田辺市東陽	2019.10.15 ～ 2020.03.31	2 棟	宗教法人　鬪雞神社
I	重要文化財　那智山青岸渡寺本堂　耐震診断事業にかかる技術支援	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2020.02.06 ～ 2021.03.31	1 棟	宗教法人　青岸渡寺
J	県指定文化財　護国院開山堂ほかの保存修理技術指導	和歌山市紀三井寺	2019.05.15 ～ 2020.03.31	5 棟	宗教法人　護国院
K	県指定文化財　阿弥陀寺大師堂の保存修理技術指導	東牟婁郡那智勝浦町南平野	2019.10.15 ～ 2020.03.31	1 棟	宗教法人 妙法山　阿弥陀寺
L	県指定文化財　須賀神社本殿の保存修理基本設計	日高郡みなべ町西本庄	2019.12.02 ～ 2020.03.31	3 棟	宗教法人　須賀神社
M	史跡　旧名手宿本陣整備事業 名手役所主屋及び離れ・蔵の復旧整備その１工事監理	紀の川市名手市場	2019.07.26 ～ 2020.03.31	3 棟	紀の川市
N	史跡　熊野参詣道紀伊路 歴史活き活き！史跡等総合活用事業（鈴木屋敷）技術支援	海南市藤白	2019.04.15 ～ 2020.03.31	1 棟	宗教法人　藤白神社
O	史跡　熊野参詣道 (浜の宮王子跡) 歴史活き活き！史跡等総合活用整備技術指導	東牟婁郡那智勝浦町浜ノ宮	2019.06.11 ～ 2020.03.31	1 棟	宗教法人 熊野三所大神社
P	史跡　和歌山藩主徳川家墓所 歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業（阿弥陀寺・鐘楼）技術支援	海南市下津町上	2018.09.27 ～ 2019.06.30	2 棟	宗教法人　長保寺
Q	史跡　丹生都比売神社境内歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業における東池石垣修理工事技術支援	伊都郡かつらぎ町天野	2019.09.20 ～ 2020.03.31	1 所	宗教法人 丹生都比売神社
R	県名勝　藤崎弁天弁天堂保存修理基本設計	紀の川市藤崎	2019.06.04 ～ 2020.03.31	1 棟	紀の川市
S	湯浅伝建地区保存修理技術指導等	有田郡湯浅町湯浅	2019.04.16 ～ 2020.03.23	—	湯浅町
T	景観重要建造物「大福院」の保存修理施工監理	田辺市湊	2018.07.17 ～ 2020.05.31	5 棟	田辺市景観まちづくり刷新協議会
U	那智の田楽伝承・活用等事業に係る設計監理	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2019.04.01 ～ 2020.03.31	1 棟	那智田楽保存会
V	熊野那智大社境内施設整備事業技術支援	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2019.04.01 ～ 2020.03.31	9 棟、2 基	宗教法人　熊野那智大社
W	重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅保存活用計画作成の支援	紀の川市名手市場	2019.05.15 ～ 2020.03.31	3 棟	紀の川市
X	登録有形文化財　郭家住宅図面作成等	和歌山市今福	2020.02.03 ～ 2020.03.31	10 棟	和歌山県
Y	高野町文化財保存活用地域計画調査支援	伊都郡高野町高野山	2019.05.07 ～ 2020.03.31	—	高野町

平成31・令和元（2019）年度　受託業務所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等業務



文化財建造物の保存修理技術指導業務等



田屋遺跡の第 4 次発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～室町時代
所　在　地：和歌山市田屋
調査の原因：県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業
調 査 期 間：2019.04 ～ 2019.06
調査コード：18-01・093-2

はじめに

田屋遺跡は、紀ノ川北岸の和歌山市田屋、小豆島周辺に広がる、主に弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡である。当文化財センターでは、和歌山県から委託を受け、県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡の発掘調査を平成 27 年度から 4 次にわたり行っており、今回が第 4 次調査にあたる。第 4 次調査の調査区は第 3 次調査区の約 40m 北に位置し、調査面積は 1,049.3㎡である。

調査の成果

第 4 次調査では、調査区を南北 2 つに分け、北から 4-1 区・4-2 区として調査を行った。

4-1 区では、東から西方向へ延びる溝を 4 条検出したほか、4-1 区と 4-2 区の境界付近で南北に延びる耕作痕を検出した。

4-2 区では、調査区を東西に横切る溝や斜行する溝、耕作痕のほか、8 世紀頃の土師器・須恵器・製塩土器が多数出土した土坑を検出した。また、検出した溝には、西端で弥生土器が集中して出土したものもある。

4-2 区の中央には、北東から南西方向に斜行して延びる幅約 2.4 m・残存する深さ約 0.5 ～ 0.6 mの大溝を検出した。大溝からは遺物がほとんど出土しておらず、明確な時期は判断しがたい一方、頻繁に浚渫を行うような幹線水路の可能性がある。また、大溝の北側では溝に沿うように長軸約 0.1 ～ 0.3 m・短軸約 0.1 mの土坑列を検出した。類似した土坑列は、平成 27 年度に行った田屋遺跡第 1 次調査や和歌山市太田・黒田遺跡、井辺遺跡などで検出されており、今後の比較検討が必要である。検出した溝のなかには、弥生土器が集中して出土したものもあり、今回の調査地付近では弥生時代後期～奈良時代の長期間、断続的に人々が当地域の開発に関与していた痕跡がみられる。

なお、大溝より南側では遺構が減少し、溝の南西から北東へ延びる耕作痕と小穴がまばらに見られるのみであった。　（森田　真由香）

多数の土器が出土した土坑（東から）

田屋遺跡と調査地の位置

4 － 2 区　調査遺構全景（南上空から）

且来Ｖ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～鎌倉時代
所　在　地：海南市且来
調査の原因：秋月海南線道路改良事業
調 査 期 間：2020.02 ～ 2020.03
調査コード：19-02・050

はじめに

当文化財センターでは、和歌山県から委託を受け、秋月海南線道路改良事業に伴い 155㎡を対象に調査を実施した。

且来Ｖ遺跡は、海南市北部を東西に流れる亀の川左岸に位置し、この亀の川が形成した沖積平野に所在する弥生時代の遺物の散布地として知られる遺跡である。周辺には、亀川遺跡や岡村遺跡等が所在し、縄文時代後期から人々の活動が確認できる。且来Ｖ遺跡では、平成２年に海南市教育委員会によって遺跡北東部で発掘調査がなされており、弥生時代から鎌倉時代にかけての土坑や柱穴、井戸が検出されたほか、遺物包含層からは石庖丁や弥生土器、瓦器等が出土している。

調査の成果

今回の調査地は、遺跡の南西端部に位置する。調査区を南北２つに分け、北側を１区、南側を２区としてそれぞれ調査を行った。

１区（調査区北側）

１区では、河川の氾濫堆積と考えられる砂礫層上に遺構面となる砂質土の堆積層が存在し、溝や土坑、柱穴を検出した。中には平面形が隅丸長方形状を呈する、中世の土壙墓の可能性がある土坑も検出したが、全体的に遺構の数は少なく、特に１区北側は遺構・遺物ともに希薄である。しかし、遺構が掘り込まれる堆積層が、調査区の北壁でも確認できることから、遺構面は調査区の外側へさらに広がっていることが明らかとなった。

２区（調査区南側）

２区北半部では、比較的遺構の遺存状況がよく、土坑、柱穴・小穴、溝、落ち込み等を多数検出した。部分的ではあるが、遺構面が２面遺存することも判明している。しかし、これらの遺構の大半は、残存の深さ 0.05 ～ 0.15 m程度と非常に浅く、後世の土地開発の影響により上部が削平されたとみられる。一方で、２区南半部では、中世から近世にかけて耕作地の拡大を目的とした大規模な整地層を確認した。この整地層下には、グライ化の進んだシルト質の水成堆積層が存在していたが、北半部で確認した遺構面は削平され、遺存していないことが明らかになった。この整地層は調査区の南外側へさらに広がるものと考えられる。

今回の調査で検出した遺構の帰属する詳細な時期については今後検討が必要であるが、出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦（古代）、瓦器、サヌカイト剥片等で、中でも比較的まとまって出土しているものは、鎌倉時代と奈良時代の土器である。弥生時代中期から古墳時代の遺物も出土しているが、その多くは器面が磨滅し細片であることからも、多くが河川の氾濫堆積や後世の土地開発により再堆積したものと考えられる。

（濵﨑　範子）

且来Ｖ遺跡の位置

２区　検出遺構全景（北から）

天路山城跡の発掘調査及び出土遺物等整理

遺跡の時代：戦国時代
所　在　地：日高郡日高町津久野、比井
調査の原因：日高町比井漁港集落道路改良工事
調 査 期 間：2019.10 ～ 2019.12
調査コード：19-26・077-2
整 理 期 間：2019.12 ～ 2020.01

はじめに

当文化財センターでは、日高町から委託を受けて、天路山城跡の発掘調査等を実施した。

天路山城跡は、日高郡日高町津久野及び比井地区にまたがる戦国時代の山城跡で、標高約 70 mの山頂に位置する主郭部を中心とし、南北の尾根に曲輪が階段状に築かれた大規模な山城である。築城したのは、室町幕府の奉公衆で、室町時代から戦国時代に日高地方を拠点として勢力を誇った湯河氏とされており、城主については湯河弘春であると伝えられる。主郭からは、紀伊水道が一望でき、天路山城は湯河氏が眼下の良湊を押さえ、往来する船を監視する役割も担っていたと推測できる。これまで、縄張り図の作成・検討が行われているが、発掘調査は今回が初めてとなる。

調査の成果

発掘調査は、山頂にある主郭と天路山城南側山裾にある「土居」との、ほぼ中間に位置する平坦部を中心とした 360㎡を対象に実施した。縄張り図では、曲輪と指摘されてきた箇所である。

調査では、山城跡に直接関連する遺構や遺物は確認できず、現況の平坦部は近世後期から近代にかけ、大規模な造成により形成されたことが判明した。ただし、造成された盛土の下層では、軟質岩盤を整形し、狭小な平坦面を確保しており、また、調査区を南北に延びる現況の境界土塁の基礎部が、同じく軟質岩盤を土塁状に整形していることが判明した。この境界土塁は、調査区外の南北へとさらに続いており、南側は山裾部の「土居」周辺でも確認できることから、ほぼ途切れることなく連続すると見られる。

岩盤整形時期については、判然としないものの、天路山城機能時まで遡る可能性が考えられる。この場合、境界土塁の基礎部分は、平時における居館であったと考えられる「土居」部分と山頂にある主郭部分を繋ぐ登城経路あるいは斜路と考えることができ、その中間地点にある今回の調査区は、平時においては物資輸送の中継地点として、戦時においては土居方向から攻め登る軍勢に対する見張り場所や防御拠点として使用された曲輪と評価することができる。

整理作業の概要

発掘調査終了後に出土遺物及び現地調査記録等の整理作業を実施した。

出土遺物は僅かであるが、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、近世陶磁器、石製品、金属製品等である。

出土遺物は、洗浄、注記、登録、接合、実測図作成、写真撮影を行った。遺物実測図と遺構図はトレース、組版作成を行い、調査報告書の原稿を作成し、調査報告書を刊行した。　（濵﨑　範子）

天路山城跡の位置

調査地遠景と比井漁港（北上空から）

里野中山城跡の発掘調査

遺跡の時代：室町時代～江戸時代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町里野
調査の原因：一般国道 42 号すさみ串本道路建設
調 査 期 間：2019.09 ～ 2020.02
調査コード：19-41・004

はじめに

里野中山城跡は、枯木灘を望む標高 35mの丘陵上にあり、比高 25 mの山城である。紀伊半島南東部の山城及び城館遺構は少なく、貴重な遺跡の一つであるが、踏査以外の調査例はなかった。平成 10 年に和歌山県教育委員会が実施した分布調査において、土塁や堀等が確認されたが、築城年代や築城者も不明である。地元では「中山城」ではなく、「中山の城屋敷」と呼ばれている。伊豆の伊東祐親の末裔が日向国より逃れ住んだとされているが、確かなことはわかっていない。

現状は雑木林であるが、近世末から近代以降に開墾され、山の西斜面には柿・杉・檜等を植えた段々畑として築かれた石積みと西麓まで続く石段が残る。

調査の成果

今回の調査は、一般国道 42 号すさみ串本道路建設に伴うもので、丘陵の頂部と東西の斜面について発掘調査（調査面積 1,745.9㎡）を行なった。その結果、里野中山城跡は、四方に土塁を巡らせた山城であることが確認できた。山頂の基盤層である岩盤層までの土を削って平坦地を造って曲輪とし、その際に出た土を曲輪の外側に盛り上げて土塁としていた。

曲輪は、平面規模で東西 29 m、南北 23 ～ 38 mの台形状を呈する。後世の耕作や自然崩落等によって、曲輪の基底部や土塁、東西の斜面も削られて元の状態が不明な部分も多いが、北土塁では基底部から高さ 3 m以上が残っており、北・東土塁の内側には犬走状の段が認められる。土塁はほぼ一周するが、曲輪の北東隅と南東隅に途切れる部分があり、虎口の可能性がある。

南土塁の曲輪内には、土塁裾部をめぐるように掘られた溝状の窪みがある。水捌けの悪い岩盤層を基底部としたため、曲輪内の排水溝の可能性がある。

曲輪内の北部で、長軸 1.63 m、短軸 1.15 m、残存の深さ 0.4 mの楕円形の土坑を検出した。上位から 0.1 ～ 0.4 mの角礫や割石、土師質土釜口縁部が出土した。土師質土釜は細片ではあるが、室町時代から安土桃山時代のものと考えられる。

曲輪南東部には、南北方向に延びる長さ 14 mほどの踏み固めたような遺構があり、通路の可能性がある。

その東隣には基盤層の岩盤を削って造られた、長軸 1.97 m、短軸 1.67 m、残存の深さ 1.0 mの楕円形を呈する土坑があり、水溜めではないかと考えられる。

曲輪内や東斜面の堆積土から、唐津焼茶碗や備前焼擂鉢等の安土桃山時代から江戸時代初め頃の遺物が出土したことから、これらの遺物が山城の存続時期を示す可能性がある。

海に面した丘陵上に築かれた里野中山城は、海路と内陸部分の佐本や大鎌に続く道の分岐する交通の要衝に築かれた山城であった。

（田之上　裕子）

里野中山城跡の位置

曲輪北半部と土塁（南西から）

結城城跡の発掘調査

遺跡の時代：室町時代～江戸時代
所　在　地：東牟婁郡串本町有田上
調査の原因：一般国道 42 号すさみ串本道路建設
調 査 期 間：2019.08 ～ 2019.09
調査コード：19-42・022

はじめに

結城城跡は、紀伊半島南部の串本町に位置する。丘陵裾部が張り出した谷間を蛇行しながら南下して太平洋に注ぐ有田川左岸の標高 84m の丘陵頂部にあり、比高 75 mの山城である。過去に実施された分布調査において、堀・土塁・曲輪等が確認されている。築城年代や築城者は不明であるが、地元では鎌倉公方・足利持氏の遺子とともに関東管領上杉氏や幕府に反抗して常陸結城城合戦で敗れ討ち死にしたとされる結城少将氏朝が逃れ住んだと伝えられている。

主要な陸上交通路であった熊野街道から離れていた串本だが、紀伊半島を中心した海上交通路においては重要な地域であったと考えられる。

調査の成果

今回の発掘調査は、一般国道 42 号すさみ串本道路建設に伴うもので、調査面積は 91㎡である。調査地は、結城城跡のある丘陵の東麓の一部を調査した。調査区は、北側の水田地が 1 区、中央の町道部分が 2 区、南側の家屋基礎を含む部分を 3 区とした。1・3 区で多くの柱穴と小穴を、2 区で石積井戸と石列を確認した。

石積井戸の井側は、長軸 1.6 m、短軸 1.1 mを測り、平面形が楕円形を呈する。積石に角礫や割石を使用し、上段の石材が 0.45 ～ 0.6 m大、下段の石財が 0.2 ～ 0.3 m大と下位にいくほど石材が小さくなっている。埋設された現行の水道管の下で検出しため、水道管のある南側は掘削できず、北側のみを深さ 0.9 mまで掘り下げた。埋土は 0.1 ～ 0.2 m大の礫を多く含む黄灰色土で、一気に埋められた状況が確認できた。遺物は、井側内の上位から、美濃焼皿、唐津焼鉢等、安土桃山時代から江戸時代初頭の陶器片が出土した。

井戸の東側に近接して石列が確認された。石列の長さは 1.2 mを測り、高さ 0.18 mほど段状に盛土した上に、0.1 ～ 0.5 m大の角礫や割石を並べている。石積井戸に続く石段の可能性がある。2 区は狭小な上、調査区の東端で検出したため、さらに東側に続く遺構であるかは不明である。

3 区の北側で、323 小穴を検出した。径 0.25 m、残存の深さ 0.09m を測る。埋土の上位から瓦質擂鉢の体部片が、遺構の基底部から同一個体の口縁部から体部の破片が角礫の上に伏せられた状態で出土した。瓦質擂鉢は、14 世紀中頃から後半頃のものである。

その他、柱穴や小穴を多く検出したが、建物としての明確な柱並びは確認できなかった。石積井戸を中心とした、屋敷地、あるいは結城城跡の西麓に当ることから結城城に関係する建物群であった可能性もある。柱穴の出土遺物は少なく細片であるが、室町時代から安土桃山時代頃のものと考えられる。（田之上　裕子）

結城城跡の位置

２区　石積井戸と石列（西から）

和歌山城跡の第１次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：和歌山市七番丁、九番丁
調査の原因：和歌山県立医科大学薬学部新築
整 理 期 間：2019.04 ～ 2020.03
調査コード：17-01・375

はじめに

和歌山城は和歌山市の中心地に位置し、独立丘陵の岡山（虎伏山）を中心に築かれた平山城である。調査地は、内堀を挟んで和歌山城の北側に位置する三の丸の一画で、付近には紀州徳川家の付家老をはじめ重臣の屋敷地が集中している。発掘調査は平成 29・30 年度に、面積約 4,200㎡を対象に実施した。

調査で出土した遺物には、土器類、瓦類等が遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）に 487 箱と水漬けした木製品が約 500 点あり、これらの遺物に加え調査時に作成・撮影した遺構図面・遺構写真の整理作業である。

整理作業の概要

業務は平成 31・令和 2 年度の 2 箇年で実施するもので、本年度は第 1 次となる。遺物洗浄は発掘調査に並行して応急整理で実施しており、整理作業の内容は遺物の注記・登録・接合・補強及び実測図作成、現場図面の整理、各種登録データのパソコン入力などである。

注記作業は、コンテナ 487 箱の土器類・瓦類のほか、抽出した土製品・石製品を対象に実施した。個々の遺物について、ポスターカラー（白色）により調査コードと出土遺物登録番号の注記作業を行い、その後、注記の劣化を防ぐ目的で速乾性ニスを塗布した。

登録作業は、土器類・瓦類・石製品・土製品・金属製品・木製品・骨角製品などすべての遺物を対象に、種類・器種等を登録番号ごとに数量をカウントし、写真撮影を行っている。なお、登録番号の前に石製品には「Ｓ」、土製品には「Ｃ」、金属製品（銭貨）には「M」、木製品には「W」、骨角製品には「Ｂ」のアルファベットを冠している。

接合・補強作業は、土器類・瓦類を対象に実施しているが、一部は次年度の作業となっている。

遺物の実測図作成は、調査報告書に掲載するのに必要な遺物の実測及び拓本作業を実施した。本年度の対象は、木製品・金属製品（銭貨含む）、骨角製品の全点と土器類（土製品を含む）の一部である。

この他、劣化が危惧される金属製品・木製品の一部についてバキュームシーラーで真空パック作業を行っている。

整理作業の成果

江戸時代の屋敷地から出土した遺物は多種多様で、土器類では供膳具、調理具、貯蔵具、燈火具・茶道具・仏具・化粧道具・遊具・園芸具などが出土している。この他、動物の骨や貝殻などの食物残渣のほか、遺存状態の良い木製品も多く、漆器椀や下駄以外にも荷札や木簡・櫛・茶筅・鳥籠等が出土しており、屋敷地内での生活の様子を窺う資料が揃っている。

江戸時代以前の遺物は、それほど多くないものの、弥生時代以降各時期の遺物が出土しており、調査地付近に集落が存在したことが分かり、調査地付近の土地活用の変遷を窺うことができる。　　（川崎　雅史）

遺物の接合作業

出土した様々な下駄

和田岩坪遺跡の出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：和歌山市和田
調査の原因：名草排水機場建設工事
整 理 期 間：2019.05 ～ 2020.02
調査コード：18-01・302

はじめに

当文化財センターでは、昨年度に近畿農政局から委託を受けて、名草排水機場建設工事に先立ち和田岩坪遺跡の発掘調査を実施した。本年度は、発掘調査業務で出土した遺物及び現地調査記録等の整理作業である。

和田岩坪遺跡は、和歌山市和田に所在し、和歌山平野の南東部の和田川沿いに位置する。

和田岩坪遺跡の調査は、昭和 31 年の名草川改修に伴う発見に端を発し、昭和 56 年の駐車場用地造成に伴う和歌山市教育委員会による小規模な調査がある。

整理作業の概要

出土遺物の内、土器・石器類は、遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 78 箱である。その他、木器・木製品・木質遺物、自然遺物である。出土遺物は、応急整理済みの物を省いて洗浄作業、遺物の分別作業、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業、遺物破片点数等の内容登録作業を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強・復元、遺物の実測図作成・実測遺物台帳登録・遺物実測図のトレース・トレース図のレイアウト組版作成、実測遺物及び保存処理対象外の木製品・木質遺物の写真撮影、遺物写真図版の組版作成、その他集計登録データ等のパソコン入力を行った。

現地調査の遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面の作図を行い、調査報告書に掲載する図面原稿を抽出し、デジタルトレース作業を行った。また、現地調査で撮影記録した遺構写真は全写真を対象に、写真撮影内容の記載作業を行うと共に、調査報告書に掲載する遺構写真図版の組版作成を行った。

木器・木製品の内、22 点は腐朽を防止し、今後の保存・活用を容易な状態にするために保存処理を専門業者に再委託して行った。木製品は、ＰＥＧ含浸法及び真空凍結乾燥法による保存処理に依っている。

また、木器・木製品を含む木質遺物全点（244 点）を対象にして専門家による樹種同定を行った。さらに、種実についても専門家による同定を行った。

整理作業の成果

調査及び整理作業に伴い、西側の調査地 1 区の自然流路からは、弥生時代終末期から古墳時代前期を主体として、弥生時代前期から室町時代の土器・石器が総数 9,580 点、東側の調査地 2 区からは、弥生時代前期と鎌倉時代を主体として、江戸時代までの遺物が総数 1,264 点を把握できた。

これらのことから、和田岩坪の地は、標高の低い立地にも拘らず弥生時代前期から人々の営みが開始され、幾たびかの土砂流や湛水に悩まされながらも断続的に生活した人々の痕跡が明らかとなった。

（土井　孝之）

樹種同定のための切片プレパラート作成

遺物の復元作業（鎌倉時代の土師器土釜）

田屋遺跡の第１次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～室町時代
所　在　地：和歌山市田屋、小豆島
調査の原因：県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業
整 理 期 間：2019.11 ～ 2020.03
調査コード：15-01・093、16-01・093、
18-01・093、18-01・093-2

はじめに

田屋遺跡の発掘調査は、当文化財センターが平成27年度から同31年度にかけて和歌山県から受託して実施した。出土遺物等整理業務は、４次の調査において出土した遺物や現地調査記録の整理作業であり、本年度は２次にわたって行う業務の第１次である。

整理作業の概要

整理作業の対象は、弥生時代から室町時代にかけての土器、石器等の出土遺物（遺物収納コンテナ64箱）及び現地で作成した記録図面・写真資料である。

作業は、調査時に応急整理を済ませたものを省いた出土遺物の洗浄、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記、内容登録、接合・補強、実測図作成のほか、遺構図面のデジタルトレース、本文原稿の執筆を行った。また、諸作業として現地で撮影したフィルム写真の整理、本文原稿の仮組を行った。

整理作業により、出土遺物の時代や遺構の性格などをより詳しく把握することができた。次年度には、遺物の復元作業、遺物実測図のトレース作業、遺物の写真撮影、遺構・遺物実測図のトレース図の組版作成等を実施し、調査報告書を刊行する。　（森田　真由香）

遺物の接合作業

立野遺跡の出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～鎌倉時代
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：すさみ町集合住宅建設
整 理 期 間：2020.01 ～ 2020.03
調査コード：17-41・002

はじめに

立野遺跡の調査は、平成29年度に和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課が実施し、当文化財センターが立野遺跡確認調査等支援業務として県文化遺産課の支援を実施した。本年度は、発掘調査業務で出土した遺物及び現地調査記録等の整理作業である。

立野遺跡は、近畿自動車道紀勢線関連事業に伴う発掘調査（第１次調査）を始め、５次にわたる調査が実施されている。特に、第１次調査の調査区３においては、弥生時代前期の自然流路から、多くの弥生土器、突帯文系土器、石器・石製品の他、多種多様な木器・木製品が出土し、注目される遺跡となっている。

整理作業の概要

出土遺物は、遺物収納コンテナ（容量28ℓ）にして７箱である。出土遺物は、遺物への調査コードと出土遺物登録番号の注記作業、遺物破片点数等の内容登録作業、木質遺物の真空パック作業を行った。

調査報告書原稿として、県文化遺産課により既に作成されていた本文原稿、遺構・遺物挿図原稿、遺構写真図版原稿等の補筆・再編集を行った。

整理の成果

遺物は、僅かであるが、その内、弥生時代前期の土器と縄文時代晩期の突帯文系土器との共伴関係を探る点においても注目される。　（土井　孝之）

立野遺跡の出土遺物

道の川集落跡（仮称）の発掘調査及び出土遺物等整理

遺跡の時代：近現代
所　在　地：田辺市本宮町三越
調査の原因：熊野古道見どころ整備事業
調 査 期 間：2019.10 ～ 2019.11
整 理 期 間：2019.11 ～ 2020.03

はじめに

和歌山県が実施している熊野古道見どころ整備事業の３年目の事業として、熊野参詣道中辺路沿道の廃村となった道の川集落跡の発掘調査、解説板の製作設置を実施した。また、平成 29 年から３箇年にわたり実施してきた発掘調査・遺跡整備について出土遺物等整理業務を行い、報告書を刊行した。

調査及び出土遺物等整理の概要

業務ではまず、必要な発掘調査等機材の調達、必要な人員の確保を行い、田辺市本宮町三越に所在する道の川集落跡の発掘調査と、集落内の石垣調査を実施した。調査地は和歌山県観光振興課及び田辺市と現地踏査を行い協議して選定した。調査地には昭和 40 年代まで建物が建っており、移転後に建物は解体され、杉などが植林されている。発掘調査に先立ち、調査地内の下草や枝葉を除去したところ、近現代の建物の基礎を確認した。その後、調査地内でトレンチ３本を設定・掘削したところ、近現代の土地造成の痕跡を確認した。また、集落内で踏査を実施し、江戸時代後期の瀬戸焼や肥前系陶磁器を採集した。トレンチの掘削後には、調査地と集落内の石垣５箇所でＳｆＭ－ＭＶＳの写真撮影を行い、オルソ画像と３Ｄモデルを作成した。調査終了後に、調査地近くの熊野古道沿いに解説板を設置した。解説板には、道の川集落及び発掘調査成果の概要について和文と英文で記載した。なお、三次元計測、解説板翻訳、解説板製作設置は再委託した。

出土遺物等整理は、祓殿石塚遺跡、湯川宿所跡、道の川集落跡の３遺跡について実施した。道の川集落跡出土遺物（コンテナ１箱）の洗浄、注記、登録、接合・補強、復元を行い、３遺跡の出土遺物の実測図作成、写真撮影、遺物実測図トレース、組版作成を行った。遺物トレースはロットリングペンで、遺構トレースはデジタルトレースで行った。並行して調査報告書の原稿を作成し、調査報告書を刊行した。　（山本　光俊）

解説板設置完了

調査地オルソ画像

新宮城下町遺跡の第 3 次出土遺物等整理

遺跡の時代：縄文時代～江戸時代
所　在　地：新宮市下本町
調査の原因：新宮市文化複合施設建設
整 理 期 間：2019.07 ～ 2020.03
調査コード：17-43・043

はじめに

新宮市文化複合施設建設に伴う調査は、平成 27 年の確認調査に始まり、平成 28 年 2 月～ 6 月にかけて第 1 次発掘調査、平成 30 年 5 月から翌 31 年 3 月まで第 2 次発掘調査などが実施されている。この内、今回の整理業務の対象となったのは主に第 2 次発掘調査に係る出土遺物や現地での記録類である。

整理作業の概要

出土遺物の基礎的な整理作業

出土遺物は、土器類･瓦類･石製品･金属製品などで、遺物収納コンテナ (容量 28 ℓ) にして 212 箱である。土器・石製品については、調査現場での応急整理済みのものを省いて洗浄作業を実施し、その後、個々の遺物に調査コードと出土遺物登録番号の注記作業を行った。また、遺物全量について破片数及びその帰属時期や種類・器種等に分類する内容登録作業を実施した。

主要遺物を対象とした整理作業

基礎的な作業を終えた後、大型土坑や地下式倉庫などの主要遺構から出土した遺物を中心に接合作業を行った。この際、個々の遺構内だけではなく隣接する遺構や直上の遺物包含層から出土した物も含めて実施している。その後、これらの遺物の内、調査報告書に掲載する予定の遺物については、遺物充填材による補強・復元作業を行い、さらに実測図作成並びに実測図のトレース作業を行った。

記録写真・遺構図面の整理

現地で撮影した遺構等の記録写真については、色補正並びに歪み補正などを施し tiff データとして保存した。また、遺構図面については検討･修正を加えた後、報告書掲載予定の一部についてデジタルトレースを実施した。

調査指導ほか

出土遺物には南伊勢で生産されたと思われる土器が多く見られるところから、この時期の遺物に詳しい三重県教育委員会の伊藤裕偉氏を招聘し、ご教示いただいた。また、こうした成果や遺構の時期などについて資料を作成し、新宮市の主催する委員会に提出した。

整理作業の成果

整理作業に伴い、出土遺物の大半が中世に帰属するものであることが判明した。その中でも 12 世紀後半から 13 世紀初めと 14 世紀末から 16 世紀にかけての時期に集中する傾向が看取できる。前者は、その遺物の組成から寺院や有力者の屋敷地の可能性が高く、後者については倉庫群を含む港湾施設の一部と考えられる。

次年度については、さらに遺物の実測図作成や実測図のトレース作業を行うとともにこれらの成果を分析、集約して調査報告書を刊行する予定である。

（村田　弘）

土器の実測作業

土器の復元作業

根来寺遺跡の発掘調査支援

遺跡の時代：室町時代
所　在　地：岩出市根来
調査の原因：旧県会議事堂整備事業
支 援 期 間：2019.04 ～ 2020.03

はじめに

和歌山県が発注し、和歌山県教育委員会が実施する旧県会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡発掘調査支援業務を実施した。支援業務の対象は移築された旧県会議事堂の西側で検出された根来寺遺跡の階段状遺構の発掘調査及び階段状遺構型取成形品製作、半地下式倉庫型取成形品の移設作業、土器等の復元作業である。

発掘調査の概要

業務ではまず、必要な発掘調査等機材の調達、必要な人員の確保、機械掘削等の再委託の手配を行った。

発掘調査は、階段状遺構の型取を実施するため、重機掘削及び人力掘削で型取り範囲を再発掘した。再発掘後、盛土の堆積状況及び階段状遺構の保存状態の確認と図化を行い、ＳｆＭ－ＭＶＳの写真撮影を行い、オルソ画像を作成した。

その後、型取り作業を行い、シートで遺構面を保護した後、土嚢と掘削土で全体を埋戻して重機で転圧し、ブルーシートで全体を覆い、埋戻し状況を図化して発掘調査は終了した。

型取り及び設置業務の概要

型取り及び設置業務は専門業者に再委託して実施した。型取り作業は、石積の目地をラップ等で埋め、遺構全面にシリコンを塗布した後、ＦＲＰ（繊維強化プラスチック）を貼り付けて硬化させ、形状を維持するため角材を取り付けて補強、ＦＲＰの脱型を行った後、シリコンを剥ぎ取り、現地から搬出した。ＧＲＣ（ガラス繊維補強コンクリート）成形品の製作は、委託業者の作業所で行った。ＦＲＰとシリコンを作業所に搬入し、ＦＲＰを反転させて再度組み立てた後に、石の位置などの調整や不要な部分の切り取りを行い、成形品の形状と大きさを確定させた。その後、成形品製作のために分割し、再び反転させて成形品の型枠を製作した。型枠にＧＲＣを塗布し、硬化した後に金属製の骨組みを取り付け、脱型して一定時間乾燥させた後、細部の調整などの仕上げ作業を行った。その後、写真を基に石や地面の彩色を行い、ＧＲＣ成形品を完成させ、根来寺西側の仮置き場に搬入した。なお、ＧＲＣ成形品は次年度に現地に設置予定である。

設置作業は、昨年度製作した半地下式倉庫ＦＲＰ成形品を和歌山県教育委員会の収蔵庫から搬出し、設置場所付近で仮組した。その後、各パーツの調整と接合部の補強、ステンレス製骨組みの高さ調整、設置場所に搬入し再度仮組、設置面の高さ調整と全体のおさまりを調整、接合部分の目地埋め、補彩と展示状況下での色彩調整、キャプション設置を行った。

土器等の復元

型取り成形品製作のため、土器等復元作業を実施した。鬼瓦２点、青磁皿１点、染付皿２点、備前焼壺１点の計６点を復元した。　（山本　光俊）

階段状遺構の型取作業

設置された半地下式倉庫ＦＲＰ成形品

和歌山城跡の第 39 次発掘調査支援

遺跡の時代：江戸時代
所　在　地：和歌山市九番丁 11 番
調査の原因：市営駐車場建設
支 援 期 間：2019.07 ～ 2019.10

はじめに

当該業務は、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団（以下、市財団）が実施する和歌山城跡第 39 次発掘調査の支援業務である。支援業務の内容は、市財団職員の指示のもと行った機械掘削・人力掘削、図面作成・写真撮影等の記録保存作業の支援及び調査の所見・調査日誌の作成である。

今回の調査地は、安政 2（1855）年の「和歌山城下町絵図」によると、調査区全体が当時の評定所にあたり、南側が当時の道路に面することになる。

調査は、調査区を 3 地区に分けて行い、当文化財センターによる支援の対象は 2 区と 3 区の一部である。本文では、主に 2 区の調査の所見について紹介する。

調査の所見

2 区の調査の対象とする遺構面は 3 面であった。2 区の北側に位置する 1 区の北半部では、嵩上げを繰り返したことによる多くの遺構面が確認された。2 区ではそうした痕跡が確認できなかったことから、2 区の第 3 遺構面に相当する時期には調査区の南側で標高が高くなっていったことが窺える。

和歌山城跡と調査地の位置

幕末から明治時代頃の第 1 遺構面では、2 区の北西部で水琴窟状の遺構を検出した。この遺構の中央では底部を穿孔し上下を返した甕が据えられ、掘方は瓦で充填されていた。

18 世紀頃の第 2 遺構面では、井戸、石列、礎石などを検出した。井戸は後述する大型石組遺構の南西端に重複して造られていた。井戸は検出面では瓦積みであるが、標高約 0.4 m以下では木枠が用いられていた。また、2 区の南端では一対で柱間 4.2 mの礎石が検出された。周辺に礎石が無く建物としての並びが続かないこと、「和歌山城下町絵図」において礎石の検出箇所が道路と評定所の境界に近いことから、この礎石が評定所の門跡の控え柱である可能性もある。

17・16 世紀頃の第 3 遺構面では、多くの柱穴を検出したほか、1 区で一部を検出していた大型石組遺構の全容を明らかにした。第 3 遺構面で検出した柱穴は径 0.4 m程であり、中には据石を伴うものが複数見られた。一方でこれらの柱穴から建物とみられる柱並びは確認できなかった。2 区の南側では、柱間が不均等ながら東南東 - 西北西方向に延びる柱穴列を 2 列検出した。柱穴列は、土地境界の柵の可能性がある。

大型石組遺構は 2 時期あり、東壁・南壁の一部を再利用している。1 区の上層で、内側の石組の北壁にあたる箇所で石積が検出されていたことから、石組遺構は縮小改築されたものとみられる。内側の石組遺構では、基底部のやや上から 17 世紀初頭の焼塩壺が出土した。

この他、調査地内から「二分口」という評定所内の役所名や役人の名前と思われる人名を墨書した土器なども出土している。　（森田　真由香）

大型石組遺構（東から）※現地公開資料より引用

青木Ⅰ遺跡の発掘調査支援

遺跡の時代：鎌倉時代
所　在　地：有田郡湯浅町青木
調査の原因：町立こども園建設
支 援 期 間：2019.10 ～ 2020.02
調査コード：19-19・006

はじめに

湯浅町の依頼を受けて湯浅町教育委員会が実施する青木Ⅰ遺跡発掘調査の支援業務を実施した。湯浅町立こども園の園舎建設部分である 1,384.2㎡を対象として発掘調査を行った。

業務の概要

湯浅町教育委員会が実施する発掘調査のうち、航空写真測量・基準点測量、機械及び人力掘削、遺構実測図の作成作業、写真撮影、埋戻し作業の支援を行った。

業務にあたっては、湯浅町教育委員会担当職員の指示を受けて実施した。出土遺物等整理作業は当文化財センターにて実施した。

今回の調査で検出した遺構の時期は、概ね鎌倉時代のものである。遺物を伴う遺構は少ないが、瓦器椀が 11 個体程度重なった状態で出土した地鎮遺構や、近くを流れる山田川の氾濫堆積層を検出した。また、調査区南端からは弥生土器が出土しており、調査区南側に広がる丘陵上から流れ込んできたものと考えられる。　（山本　光俊）

瓦器椀の出土状況

湯浅町内遺跡の報告書作成支援

遺跡の時代：鎌倉時代～室町時代
所　在　地：有田郡湯浅町青木
調査の原因：遺跡内容確認・町立こども園建設
支 援 期 間：2019.08 ～ 2020.03

はじめに

当文化財センターでは、湯浅町の依頼を受けて、2018 年度に湯浅町内で実施された湯浅城跡と青木Ⅰ遺跡の試掘確認調査で出土した遺物等の資料を整理し、報告書の作成を支援する業務を実施した。

作業は、まず出土遺物の接合・補強・実測図作成・トレース・写真撮影及び調査区・遺構のトレース作業を行った。その後、湯浅町の作成した本文原稿をもとに、組版・編集・校正を行い、調査年報を刊行した。

調査の成果

湯浅城は中世前半期に活躍した湯浅氏の居城であり、出土遺物は土師器皿や瓦器椀など鎌倉時代の出土遺物を含んでいる。和歌山県内でも特に古い段階の代表的な城であり、貴重な調査事例といえる。調査区では複数の面から礎石状の石を検出しており、瓦片が若干出土している点も注目される。

業務成果は、『湯浅町埋蔵文化財調査年報』として湯浅町教育委員会から刊行された。また、湯浅城跡の調査成果は関連研究成果を加え、有田市・湯浅町・有田川町教育委員会により、『湯浅党城館跡総合調査報告書』として別途刊行された。　（丹野　拓）

遺物実測図の組版作業

竜松山城跡の発掘調査等支援

遺跡の時代：室町時代～戦国時代
所　在　地：西牟婁郡上富田町市ノ瀬
調査の原因：遺跡内容確認
支 援 期 間：2019.08 ～ 2020.03

はじめに

当文化財センターでは、平成 31 年度に上富田町が和歌山県教育委員会の協力を得て実施した竜松山城 (龍松山城) 跡の発掘調査成果について、出土遺物等整理作業の一部の作業工程を受託し、支援業務を行った。

整理作業では、竜松山城跡で出土した遺物のうち、土器類・石製品類及び鋳造関連遺物について、注記・接合・補強と実測図の作成・実測図のトレースを行うとともに、調査区・遺構のトレース作業を行った。作業は、和歌山県教育委員会の指導のもと、実測対象資料の選定が行われており、整理補助員を中心に作業にあたる人員を雇用して業務を実施した。

調査・整理の概要

竜松山城跡は上富田町市ノ瀬に所在する山城で、城下には富田川下流の平野部が開ける口熊野地域の要衝の地にあたる。この城の周辺で平野部は狭くなり、城下を通る熊野参詣道も本宮大社に向かって紀伊山地の山岳地域に入っていく。

城主の山本氏は南北朝期に南朝方の勢力として登場し、室町時代には幕府の奉公衆となり、紀伊国守護の畠山氏の分国支配の一翼を担ったとみられる。

応永 34（1427）年に足利義満の側室北野殿が熊野詣でをした際には、山本氏が市ノ瀬で接待を行ったと『熊野詣日記』に記されており、竜松山城跡の出土遺物との関連についても注目されるところである。なお、北野殿はその後、熊野古道・中辺路を通り、湯川宿所、道湯川集落、祓殿石塚遺跡の所在地を経て、本宮大社へ参っている。

天正 13（1585）年の羽柴秀吉の紀州攻めの際には上富田町朝来にある塗屋城が最前線の城として築かれ、竜松山城は 3 箇月の籠城戦が行われた。

上富田町と和歌山県教育委員会による発掘調査は、主郭及び虎口部分で実施されており、約 100㎡の範囲が調査された。遺物は土師器・陶磁器類を中心に、石製品・金属製品も多数出土した。

今回の業務で実測図の作成対象とした出土遺物は、計 149 点で、その内土器類は青磁 37 点・白磁 12 点・青花 4 点、瀬戸焼 8 点・備前焼 28 点・常滑焼 5 点・信楽焼 2 点・産地不明陶器 2 点、土師器 29 点・瓦質土器 3 点・東播系須恵器 1 点であった。青磁は碗が多数出土しているほか、皿や盤・香炉等があり、白磁には八角坏が複数見受けられた。備前焼は多量の破片が出土しており、実測可能な口縁部･底部を中心に接合･補強作業を行い、壺・甕・擂鉢の実測図の作成を行った。また、鍛冶関連遺物として、鞴羽口 2 点、取瓶 1 点、金属滓 1 点を実測している。石製品類は石臼片 8 点、火打石 3 点のほか、硯・碁石・砥石各 1 点を実測した。

この他、多数の金属製品と一括の炭化穀物等も出土している。竜松山城跡出土遺物は、中世の紀南地域を代表する山城の資料として重要であり、次年度も引き続き整理作業を継続実施する予定である。（丹野　拓）

整理対象遺物の内容

遺物の実測作業

天路山城跡の発掘調査等支援

遺跡の時代：戦国時代
所　在　地：日高郡日高町津久野、比井
調査の原因：日高町比井漁港集落道路改良工事
支 援 期 間：2019.05
調査コード：19-26・077

はじめに

当文化財センターでは、日高町が実施する日高町比井漁港集落道路改良工事に伴う天路山城跡発掘調査等の一部について支援業務を実施した。支援業務の内容は天路山城跡の確認調査で、日高町教育委員会及び和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課職員の指示のもと、人力掘削、埋戻し作業の現場指示、実測、写真撮影、調査後の実測図と写真の整理作業、出土遺物の洗浄、遺物への注記、実測図作成、トレース、調査日誌・実績報告書の作成である。業務には技術職員１名７日間、調査補助員１名５日間、発掘作業員２名４日間、整理補助員１名２日間、整理作業員１名２日間従事した。

調査の成果

天路山城跡は、日高郡日高町津久野及び比井地区にまたがる戦国時代の山城である。調査では、これまで曲輪と指摘されてきた山頂南側の平坦部とその西側の谷状地形にそれぞれ１～５トレンチを設定し、人力掘削を行った結果、これまで曲輪と指摘されていた平坦部及びその南側で、軟質岩盤を掘り込む土坑や溝状遺構を検出し、曲輪面が存在することが確認された。

（濵﨑　範子）

５トレンチ　人力掘削作業の状況（南から）

新宮城下町遺跡の出土遺物等整理支援

遺跡の時代：縄文時代～江戸時代
所　在　地：新宮市下本町
調査の原因：新宮市文化複合施設建設
整 理 期 間：2019.05 ～ 2019.07.
調査コード：15-43・043、16-43・043

はじめに

当該業務は、新宮市文化複合施設建設に先立ち調査された内、現状保存されることとなった範囲（第１次調査の東側大半と平成 28 年度に実施された確認調査）について新宮市が総合的な調査報告書を作成するための支援業務として実施したものである。

整理作業の概要

対象となる遺物は、土器類・瓦類・石製品・金属製品等で、遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 75 箱である。これらついて基礎的な洗浄・注記作業を行った後、さらに接合・遺物充填材による補強、実測図の作成作業を実施した。この内､実測図の作成作業では、第１次調査で出土し、平成 29 年度に保存処理をしたものを含む金属製品 44 点のほか、土器類 50 点について行った。

また、確認調査分については、現地で取り上げた登録単位毎に帰属時期や種類毎に内容登録作業を行った。

なお、当該業務については、次年度も継続して作業を実施し、令和３年度に調査報告書の刊行を予定している。

（村田　弘）

金属製品の実測作業

国宝　根来寺多宝塔（大塔）の保存修理（災害復旧・一般）

建 築 年 代：室町後期 明応～天文（1492-1554）
所　在　地：岩出市根来
事業の種類：部分修理
事 業 期 間：2019.02 ～ 2019.09

建設中の軒足場

覚鑁は鳥羽上皇の援助を得て、高野山で修行僧に学問を授ける伝法会の復興などを推し進めた。覚鑁は保延６年 (1140) に根来に下山し、覚鑁の死後、正応元年 (1288) に根来寺が誕生した。戦国時代になり、根来寺は一つの都市として発展して、山内は坊院で埋めつくされた。天正 13 年 (1585) の秀吉軍の兵火によって、根来一山は焼失し、兵火をまぬがれ焼け残ったのは大塔、大師堂などわずかな堂宇のみであった。

大塔は総高 36m の大規模な塔で、一般の多宝塔と異なり下重が方五間、内陣を円形に区画する大塔形式を伝える現存唯一の遺構として国宝となっている。

近年の修理は、昭和 14 年の解体修理、昭和 36 年には第２室戸台風の災害復旧修理が行われた。平成２・３年度に屋根の部分葺替、下層亀腹及び壁面の漆喰塗り直し、相輪・風鐸の修理等が実施されている。

平成 30 年９月４日に上陸した台風 21 号の被害により、漆喰上塗りの剥落・亀裂が見られた。一部には漆喰中塗りの剥落が見られた。また、上層隅木先端の風鐸の吊り金具を固定するクサビが抜け、風鐸が下層隅棟の上に落下した。風鐸本体が破損し、真下の瓦も割れた。そのため災害復旧の国庫補助を受けて修理することとなった。漆喰補修用の足場は亀腹の廻りを囲む必要があり、これを利用して経年劣化の部分を含めて全面塗り直した(災害復旧とは別に補助申請を行った)。

平成２・３年の修理では、上層の漆喰補修はされておらず、上層の漆喰は塗り直しから 50 年以上経過しており（一度修理された痕跡があり、昭和 36 年の修理と考えられる）、全面的に劣化が見え始めていた。工事は、漆喰の塗り替え、風鐸の取り付けと割れた瓦の差し替えであるが、その規模と場所が普通ではなかった。風鐸の取り付け用の足場は高さ約 17 mとなり、足場のほぼ中程で亀腹廻りの左官用の足場と繋いだ。亀腹は周囲 23.5 m、上下には最大約４mもある。左官用の足場は３段設け、上部の水平部分は足場を移動させながらの作業を行った。掻き落とした漆喰と中塗土は土嚢袋で約 200 袋に及んだ。漆喰上塗りは継ぎ目なく仕上げたいが、3区画に分けざるを得なかった。

根来寺の関係者が立ち会い風鐸を吊り下げたときの達成感は大きかった。足場を解体し遙か上方の修理箇所を見上げた時、遠さ故に「どこをどう修理したのかよくわからない」という何とも言えない趣のない気持を味わうこととなった。　（寺本　就一）

風鐸の取り付け作業

亀腹の左官工事（漆喰塗り）

重要文化財　旧西村家住宅主屋ほか二棟の保存修理

建 築 年 代：主屋：大正４年（1915）
　　南外塀・北外塀：大正後期
所　在　地：新宮市新宮
事業の種類：半解体修理（主屋）、部分修理（外塀）
事 業 期 間：2016.04 ～ 2019.12

南面外観（ベランダ雨戸は維持管理として整備）

建物および事業、業務の概要

旧西村家住宅は、大正３年から４年にかけて西村伊作（以下「伊作氏」）自らが設計・監督して建てた自邸である。建築から 100 年が経過して破損や劣化が進み､建物下の地盤に不同沈下も発生していたため、平成 10 年から管理運営を担う新宮市が、見学施設としての健全性回復・安全性向上を目的として、同 28 年度から４ヶ年継続の国庫補助事業に着手し、その中で 36 ヶ月間に及ぶ保存修理工事を実施した。当事業においてセンターは設計監理業務を受託してきた。

保存修理の内容

前年度までに左官工事「漆喰コンクリート塗り」の「白亜の壁」と塗装工事「錆色ペンキ塗り」（いずれも伊作氏の呼称）など外廻りの施工を終えた主屋では、引き続いて室内の砂壁塗りや漆喰塗り、木部へのニス塗装やワックス塗装、照明器具や建具付属金物の復旧整備などの仕上げ作業を行った｡素屋根の解体後には、南・北外塀で石積み目地や板扉の補修、敷石や石階段など庭石の復旧・整備、物置小屋の復旧のほか、防蟻対策としてベイト剤の設置も行った。

事業を終えて

新宮市では、令和２年４月からの再開館に向けて、保存修理の終了前後から、管理者用の衛生設備・空調設備類の設置のほか、雨戸・網戸など維持管理上必要な建具類の製作など、補助事業と並行して追加工事も実施して来た。冬には修理中に持ち出されていた家具類が戻り、移植されていたユッカランとソテツもこの春４年ぶりに帰ってきて、あとは開館を待つばかり、いう段階まできていたが、未曾有の事態によって延期されている。

修理中の調査では、伊作氏の建築時の考えや思いの一部を明らかにすることも叶った。2016 年度年報『資料紹介』などで示唆したとおり、子どもたちの成長を特に重視し、文化学院（一昨年に閉院）を開校する足掛かりとなったことは間違いないだろう。現在は「陸の孤島」と呼ばれてしまう新宮という地において、自邸の建築や我が子の教育を通して「近代の夜明け」を示そうとされた伊作氏の思いは、見学を通しても十分に感じていただけると思う。その日をより良い形で迎えられることを願っている。　　（下津　健太朗）

耐震補強されて新たに公開範囲に加わる地下室
（左手は竈とボイラー、右手は洗濯槽）

二階南西の寝室（板敷きの洋間に畳を敷込んで、
「第２の子供部屋」とされた時期に復原）

重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅 主屋及び米蔵の保存修理

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：紀の川市名手市場
修理の種類：屋根葺替、部分修理、耐震診断・補強
修 理 期 間：2017.04 ～ 2019.12

主屋南西隅復原部分の組立状況

本年度は平成 29 年度から開始した保存修理事業の最終年度となり、前年度から繰り越された主屋の組立工事と本年度に発注された屋根工事を実施した。

30 年度の繰り越し工事では主屋の耐震補強工事と、主屋南西隅下屋の欠き取られていた箇所の復原を行った。耐震補強は前年度までに実施された耐震診断及び補強設計に基づき施工した。補強内容は、鉄骨フレーム補強、筋交いバンド補強、耐震壁補強、建具補強、水平ブレース補強、庇帯鉄補強、火打ち金物補強の７種類とした。施工に際して納まりの都合などから当初の計画通りに施工出来ないことが判明した箇所は、随時構造設計者に変更内容を確認、協議のうえ実施した。

復原は 29 年度に文化庁の許可を受けた現状変更の通り実施した。復原する約２坪の範囲外は平成４年に全解体修理を受けており健全な状態であった。そのため解体範囲を極力減らしたことから、貫や垂木などの取合いで施工が困難な箇所もあったが、施工方法や納まりを工夫して実施し、工事は９月末に完了した。

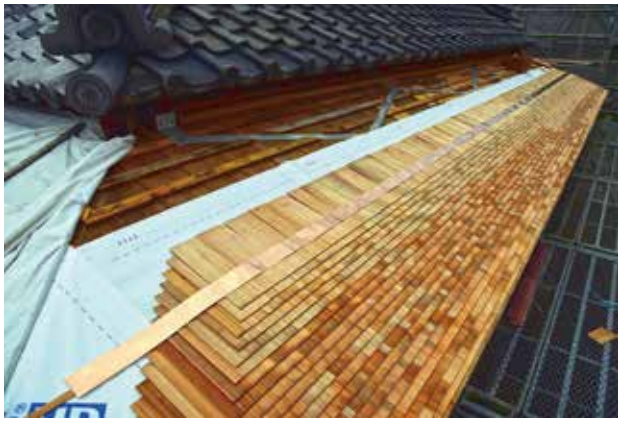
屋根工事は今回復原する主屋南西隅部分の瓦葺きと経年により摩耗していた座敷部北・東面のこけら葺き及びそれらに伴う樋などの雑工事を実施した。

こけら屋根部分は耐震補強のため化粧裏板上に帯鉄が筋交い状に付加されたが、野小舞の厚み内で納まり、野小舞と帯鉄が干渉する部分は野小舞を切り欠いて施工することができたため、当初の納まりを変更せずに施工することができた。なお、前回修理ではこけら板に椹材を使用していたが、材料の枯渇や当時の流通状況などを勘案して杉材の使用が適当と判断した。

瓦屋根工事は鬼瓦をはじめ、不足分を既存瓦に倣い新調して復原部分の本瓦葺きを施工した。また、座敷部西面の桟瓦で小屋裏に水平ブレースの部材を搬入するために一旦分解していた箇所について葺き直した。その際、破損により再用できない桟瓦があったため、新調して補足した。また、主屋居住部北面の桟瓦も部分的に破損していたため、差し替えを行った。

事業は現状変更、復原工事、耐震診断及び補強設計、耐震補強工事、部分修理、屋根葺替と多岐にわたる内容のため、当初２箇年の計画が１年延長され、また工事も繰り越されるなど決して順調に進んだとは言えないが、長年の懸案事項であった復原や、昨今重要性が再認識されている耐震補強が完了し、ひとまず建物の体裁が整ったと感じている。　（結城　啓司）

耐震補強（鉄骨フレーム）組立途中


主屋座敷部北面こけらの施工状況

重要文化財　濱口家住宅南米蔵ほか５棟の保存修理（災害復旧）

建 築 年 代：本 座 敷：江戸時代、御風楼：明治後期
南 米 蔵：江戸末期、北米蔵：明治 27年（1894）
大工部屋：明治 30年（1897）
左官部屋：明治前期
所　在　地：有田郡広川町
事業の種類：屋根葺替、部分修理
事 業 期 間：2019.02 ～ 2020.03

御風楼北面壁　下地窓まわり修理状況

事業の概要

濱口家住宅は、広大な屋敷地を有し、江戸時代に遡る主屋、本座敷のほか、明治中期の敷地拡張とともに建てられた土蔵群、明治 42 年頃につくられた御風楼を擁する。地域を代表する商家の近世から近代への発展過程を示すものとして価値が認められ、９棟が重要文化財に指定された。今回は平成 30 年９月の台風の影響により各建物で瓦葺屋根や左官壁を中心に破損が生じたため、平成 30 年度に災害復旧事業として本座敷、御風楼、南米蔵、北米蔵、大工部屋、左官部屋の６棟の修理を実施することとなり、令和元年度に繰り越して令和２年３月に事業が完了した。

保存修理の内容

本座敷　書院造りを基調とする江戸期の建物で、座敷や仏間などが高い格式で設けられている。一方で庭に面する西面と北面には杉丸太の化粧垂木が配された深い庇が架けられるなど数寄屋風の要素も取り入れており、大きな特徴となっているが、西面庇の桟瓦葺屋根が大きく破損していた。瓦屋根の分解を進めたところ、破損は屋根下地の木部にまで至っており、桁材に突き付けや大入れで釘止めされていた野垂木の殆どが土居桁から外れ、野地全体が軒先方向にずれ出していたことが破損の大きな要因であったことが判明した。このため野垂木や茅負など木部の修理と取り付け直しを行った上で金物による補強を行い、桟瓦を葺き直した。

御風楼　濱口家住宅の大きな特徴となっている木造三階建ての壮大な迎賓施設である。上階は３方にガラス障子が嵌められ、開放的な近代和風建築となっている。今回は欄間のガラスが割れた程度で建具類に目立った被害はなかったが、本座敷に向けて張り出して建ち、風当たりの強い渡廊下の屋根南端部では瓦が広範囲で飛散していた。渡廊下の軒は木細く、茅負や野垂木など木部にも破損が広がっていた。数寄屋風の凝った意匠に加え、漏水対策に杉皮を重ね張りするなど丁寧な仕事がなされていることに配慮し、木部は出来るだけ解体しないで添木などを施すことによって、当初の納まりを残すよう留意した。西側に附属する風呂及び厠では、崩れていた桟瓦葺屋根の復旧を行い、小屋組や野地の解体範囲を広げないよう必要に応じて補強を施した。左官壁が大きく破損した北面の壁については、分解前に残存する木瓜型下地窓の曲線を写し取り、竹小舞を可能な限り再用して修理を行った。

本座敷　西庇野垂木破損状況

本座敷　西庇修理完了状況（北西からみる）

御風楼渡り廊下　杉皮による屋根下地（修理前）

御風楼渡り廊下　添木を中心とした修理状況

南米蔵・北米蔵・大工部屋　敷地西側に並ぶ土蔵類は、台風で破損した本屋屋根の軒先や庇部分を中心とした瓦葺屋根と取り合う漆喰塗り込め、垂木や野地板等の木部、また腰壁板や内部土壁を復旧した。大工部屋においては、併せて漆喰壁の被災前から破損していた部分を所有者が自費で修理し、外観を整えた。大工部屋の本屋屋根では、軒先鉢巻部分の両端部と中心位置で曲面の断面を写した定規を作成し、可能な限り旧状に復する形で修理を進めた。庇などの木部や瓦葺き部分の修理においては、部材を可能な限り再用するなどして、建物の価値を損なわないようにに努めた。

左官部屋　切妻屋根の本屋平側東面に庇が取り付く小規模で簡素な建物であり、指定建造物の中で最も広範囲に被害を受けた。本瓦葺の本屋屋根は野地板まで破損が及び、大棟全体が崩壊していた。本屋屋根、東面庇ともに平葺は全体に軒先側にずれ出しており、全面的な葺き替えが必要な状況であった。また、西面の外壁では竪板壁が破損し、荒壁土が流出していた。本屋屋根は化粧野地に直接葺土が載せられる仕様となっているが、西流れでは既に改変されているものの、東流れに野地板が棟際から軒先に向かって羽重ねに張られており、漏水防止を重視した一般的な納まりとは逆さ向きの施工となっていた。これは葺土、瓦のずれ止めの効果を期待したものと考えられ、隣接する湯浅町でも確認出来る。本屋屋根と庇には一連の瓦が用いられていたため、再用する瓦材は左官部屋の正面となる東流れにまとめるなど、使用位置にも配慮した。

今回の修理範囲は台風被害を受けた箇所のみに留まったため、建物の多くにはまだ経年による破損箇所が散見されるが、重要文化財指定後初めて修理された建物もあり、今後に歴史的建造物としての価値を繋いでいく足がかりとなることを期待したい。（大給　友樹）

左官部屋　一般的な納まりと重なりを上下逆向きに張られた野地板

大工部屋　本屋根・東面庇被災状況

大工部屋　本屋根・東面庇修理完了状況

重要文化財　琴ノ浦温山荘浜座敷ほか３棟の保存修理（災害復旧）

建 築 年 代：浜座敷：大正２年（1913）、
主屋：大正４年（1915）、
南冠木門・西冠木門：大正５年（1916）頃
所　在　地：海南市船尾
事業の種類：部分修理
事 業 期 間：2019.02 ～ 2019.06

建物および事業、業務の概要

琴ノ浦温山荘は、実業家新田長次郎が黒江湾を望む海浜に営んだ別荘で、大正から昭和初期にかけて庭園や園内の建物が整えられた。平成 22 年には主屋、浜座敷、茶室の３棟が重要文化財に指定（南冠木門や西冠木門など６棟附指定）され、同 25・26 年には浜座敷・正門・北冠木門の３棟で保存修理工事が行われた。

今回の事業は、平成 30 年９月の台風で、主屋・浜座敷で瓦のズレや脱落など屋根面の部分破損のほか、南冠木門は掘立て柱が折損して転倒し、西冠木門の板扉も折損・脱落するなどの被害を受け、翌 31 年２月から破損箇所の補修を行う災害復旧事業に着手した。

保存修理の内容

主屋では脱落した軒瓦や掛瓦を復旧・補足し、浜座敷では乱れた棟積みを復旧した。西冠木門の板扉は仕口部の破損が目立ったため、解体して補修し組直した。南冠木門は、転倒時の破損が屋根・野地の一部に留まるも、根継ぎ補修の本柱と取替える控柱を良好に施工するために、地中の根巻きモルタルを一部掘削する必要が生じたため、名勝地内での現状変更を行い、工期を３箇月延長して施工した。　　（下津　健太朗）

南冠木門での柱折損・転倒状況（修理前）

浜座敷北面での棟積み破損状況（修理前）

主屋南面での軒瓦・掛瓦の破損状況（修理前）

西冠木門での板扉の破損（左）・復旧（右）状況

南冠木門の柱補修ほか復旧状況

重要文化財　東照宮本殿、石の間、拝殿及び唐門の保存修理（災害復旧・一般）

建 築 年 代：本殿、石の間、拝殿：元和 7 年（1621）
　　唐門　　：元和 7 年（1621）
所　在　地：和歌山市和歌浦西
事業の種類：屋根葺替、塗装修理
事 業 期 間：2019.02 ～ 2020.03

建物および事業、業務の概要

古来からの景勝地和歌の浦を見渡す権現山の中腹に位置する東照宮は、父・徳川家康を祀るため紀州藩初代藩主徳川頼宣により元和 7 年（1621）に建立された。

東照宮建築に特徴的な権現造りの壮大な本殿・石の間・拝殿を初め、唐門、東西瑞垣、楼門と一連の建物が残る江戸前期の装飾建築を代表する遺構である。

平成 11 年度は重要文化財に指定された全ての建物の檜皮屋根の葺き替えや塗装工事を行ったが、平成 30 年 9 月の台風 21 号の襲来により、本殿・石の間・拝殿及び唐門の正側面を中心に、檜皮葺屋根の破損や彩色の剥落などの被害を受けた。これを受けて国庫補助による平成 30 年度災害復旧事業として修復を行う計画となり、被災は免れたものの経年劣化が進んでいた本殿背面、唐門背面の檜皮屋根の葺き替えを通常の保存修理事業として併せて実施することとなった。

事業は平成 31・令和元年度に繰り越しとなり、修理に伴う調査により確認された檜皮屋根軒付や妻飾りなどの漆塗や彩色の劣化部分を、文化庁に令和元年度事業としての交付決定を受けた上で、追加して実施することとした。

石の間　平葺の施工

保存修理の内容

海風の影響を受けやすい立地条件でもあり、繊細な漆塗や彩色が全面に施された建物の修理を計画的に進めるために、建物全体を素屋根で覆って工事を進めた。当地は国の名勝にも指定されているため、現状変更の手続きを行った上ではあるが、工事期間中日本遺産の地に巨大な銀傘がかかることとなった。

屋根工事では、一旦平葺全面の解体を行った上で軒付の破損状況を調査したところ、拝殿の正面や本殿背面のほか、本殿と背面の屋根との取り合いとなる石の間軒付で板蛇腹までの腐朽が進んでいることが判明した。また、本殿と拝殿の妻部分の登り軒付も、腐朽はしていないものの檜皮材や釘の劣化が進んで全体に弛緩しており、このことが軒先部の平葺の飛散の要因となっていると判断し、全体を積み直すこととした。

平葺の葺き替えにあたっては、強風への十分な耐力を考慮して小舞板を増し打ちするなどの対策を施した。

屋根頂部に置かれた箱棟廻りでは、本殿の勝男木が台風により傾斜していることが確認されていたが、木部表面を覆う銅板包みが全体に劣化し、接続部などで割れが散見される状態となっていたため、一旦銅板全体を解体し、木部を修理した上で包み直した。木部は本殿箱棟の屋根板や胴板で蟻害が確認されたが、幸い小屋組などへは拡がっていなかった。また、本殿東側勝男木の腐朽が進んでおり、同取り合いからの漏水が屋根板の蟻害の要因と判断されたため、勝男木は新材に取り替えた。新たな銅板には黒漆を塗り直し、飾り金具の金箔を押し直したうえで取り付けた。

唐門の屋根も同様に作業を進め、腐朽・劣化が進んでいた正面側の軒付を積み替えた上で平葺全面を葺き替えた。

本殿及び拝殿　檜皮屋根工事の竣工

塗装は、本殿の背面と東面、拝殿の正面と東面の壁画や組物廻りを中心として、台風で剥落が進んだ彩色の補修を進めたが、剥落していない面でも塗装面が下地から浮いている部分が随所で確認された。このため今後の破損を予防することにも留意して西面にも施工範囲を広げ、十分な補修を行った。

石の間壁画　絵彩色の補筆

また、屋根上の妻飾り部分でも彩色の剥落が進み、破風板などの漆塗の劣化も進んでいたため、漆の上塗直しや彩色の剥落止め補筆、飾り金具補修を行った。

拝殿千鳥破風妻飾り　塗装工事竣工

唐門も当初台風で被災した迦陵頻伽が描かれた天井画の補修のみを行う予定であったが、社殿の正面に位置し、参拝者が間近で目にする建物であることも考慮し、経年で劣化していた組物廻りなどの彩色もあわせて補修した。

今回の修復は台風被害からの復旧を主眼としたものであったが、建物の特徴でもある華麗な外観を復することができ、施工中に迎えた創建 400 年の節目を飾る事業となった。　（多井　忠嗣）

登録有形文化財　郭家住宅図面作成等

建 築 年 代：洋館、診察棟　　：明治 6 年（1873）
　　主屋、離れ、土蔵：江戸後期
　　外便所、石塀　　：大正 14 年（19）頃
所　在　地：和歌山市今福
事業の種類：図面作成、修理計画
事 業 期 間：2020.02 ～ 2020.03

建物および事業、業務の概要

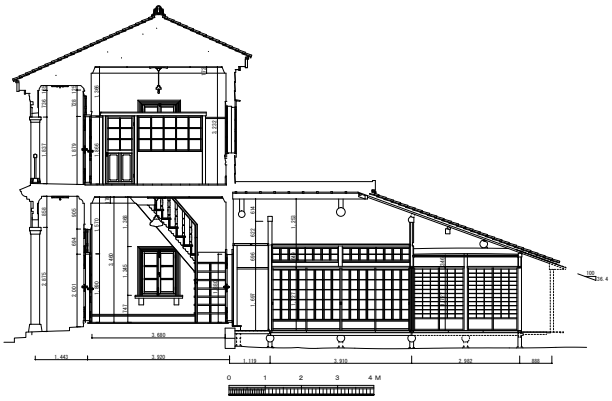
青石で積まれた石塀の奥に瀟洒な二階建ての洋館が建つ姿が印象的な郭家住宅は、閑静な住宅地である周辺景観の形成に大きく寄与している。

洋館の背面には連続して和風建築の診察棟が配され、明治初期の開業医における診療の様子を伝える。

さらに北東奥に位置する主屋は、煎茶席が設けられた江戸末期の貴重な数寄屋建築であり、凝った内装が施された望楼状の離れや 3 棟の蔵、外便所や風呂など屋敷構えの一連の建物群が残り、紀州藩の御匙医も勤めた名家の生活を伝える貴重な遺構となっている。

洋館や診察棟、主屋などの主要な建物は数年前まで所有者が居住していたため比較的健全な状態が保たれているが、改変も認められる。米蔵では屋根の一部が崩れているほか、各蔵の漆喰壁の劣化が顕著であり、近年には道路に面した石塀が倒壊するなど全体に老朽化が進んでいる。

このため、貴重な歴史的建物の保存に向けて和歌山県が進めている調査報告書作成事業に協力し、各建物の平面図や断面図などの作成を行った。また、あわせて修理事業計画の提案を行った。　（多井　忠嗣）



洋館・診察棟　南北断面図

国指定史跡　浜の宮王子跡の保存整備
～ 熊野三所大神社本殿の保存修理 ～

建 築 年 代：慶安元年（1648）
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町浜ノ宮
事業の種類：屋根葺替・部分修理
事 業 期 間：2018.11 ～ 2020.03

軒先・小屋組の木部補修状況（背面東側）

建物および事業、業務、修理工事の概要

浜の宮王子跡は、中辺路と大辺路の分岐点にあたり、史跡熊野参詣道として指定されている。当王子は現在、熊野三所大神社として祀られている。棟札によると、現在の本殿は慶安元年から当地に存在していたことが分かり、史跡の重要な構成要素と位置付けられている。

本殿は近年、屋根等の劣化が進行しており、早急に修繕の必要な状態にあったため、前年度に現地調査及び修繕に係る設計を行い、今年度は本殿の屋根葺替工事と軒廻り・棟廻りの破損部分などの修繕工事を実施した。当事業でセンターは工事の技術指導を行った。

覆屋の建設後、屋根野地までを解体して、破損の程度や各部の仕様を確認した。共皮蛇腹仕立ての軒付は、健全な部分を残す計画であったが、それを受ける軒先部材の不陸や腐朽が著しかったことから、木部補修・調整の範囲を拡張し、全周を積替える方針に切替えた。事業の計画変更を行った上で、側背面の軒付を共皮蛇腹から板蛇腹に変更して実施した。

木工事は主に雨漏りと蟻害に伴う破損に対して実施した。強度が低下した構造材は小屋内で補強して安定を図り、腐朽・欠失した部材は適宜取替えた。

屋根上の箱棟は、現状は銅板で包まれるが、旧来は欅の厚板で組立て、黒色に仕上げ塗りされていたことが確認できた。銅板の経年劣化や雨漏り、蟻害を受けて今回解体修理を行ったが、新調した銅板表面へ黒色塗装を行う、とした修理計画が往時のすがたに近付く結果ともなった。

工事を進めるなか、当社の沿革について新たな知見として、「三社権現ち乃棰」などと墨書きされた慶安期の部材も多数確認された。これは、社殿前に建つ江戸中期製作とみられる石灯籠に刻まれた「三社大権現」とともに、室町期製作の『那智参詣曼荼羅』に描かれた春日造の 3 社殿が並んだ往時の様相を想起させる。

当地は「浜宮王子」や「渚の宮」などと称されて来ており、慶安期の棟札には「三所権現社」と記される。11 世紀初期製作とされる熊野三所権現をあらわした神像を祀る社殿と解釈されているが、「三社権現」の呼称も引き続き残っていた事実。修理中に開催した地元住民への現場見学会では、そうした経緯も報告させて貰った。「三所」「三社」の違いなど詳細は不明だが、歴史や伝統に関わる業務に携わる者として、大切にすべき部分であると改めて認識した。　（下津　健太朗）

修理前の屋根（軒付は腐朽し、不陸も目立っていた）

修理後の屋根（木部の垂下修正を行った）

国指定史跡　旧名手宿本陣整備事業 名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備 その１工事

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：紀の川市名手市場
修理の種類：復旧整備
業 務 期 間：2019.07 ～ 2020.03

軸部の組立状況

名手役所は延宝３年（1675）には存在したことが史料により判明するが、正徳４年（1714）の火災で類焼し、延享３年（1746）頃に主屋が再建されたことが判明している。主屋はその後大きな改変を受け、天保４年（1833）に現在の姿となった。離れ・蔵の建築年代は明らかでないが、使用されていた瓦の文様などから文政期頃と推測される。明治期には巡査派出所として使用されて、その後貸家となった。昭和 40 年代から無住となっていたようで、破損が進行したため平成９年度に修理を前提とした分解が行われ、部材は一旦仮設倉庫に保管されたが、再建できずにいた。平成 29 年から開始した重要文化財旧名手本陣妹背家住宅の保存修理と軌を一にして史跡地全体の整備計画が作成され、当センターでも主屋及び離れ・蔵の復旧のため平成 29 年度に基本設計、30 年度に実施設計を実施した。これを受け、本年度より復旧工事に着手した。

工事は予算や工程などを総合的に検討した結果、離れ･蔵から着手することとなった。本年度は基礎工事、木工事、左官工事を実施した。平成９年度の分解時には蔵部分が既に倒壊していたこともあり、蔵部分は再用出来る部材が限られており、新補材が大半を占める。一方で離れ部分は倒壊寸前であったものの比較的部材が残存することから、極力再用率を上げるよう心掛けた。前述の史料より離れ・蔵は「御道具部屋」と呼ばれていたことが判るが、どのように使用されていたかは不明である。構造的には離れ部分が特殊な架構をしており、屋根荷重の大半を細い床柱が受けていたため折損していた。床柱を再用するため、２間飛ばしの梁を新たに天井裏に挿入して、荷重を受けるよう改善した。また、蔵部分は将来的に展示施設となることから耐震性能が求められ、耐震診断の結果従来の土壁では耐力を確保できないことが判明し、伝統的な荒壁の代わりに荒壁パネルを用いて耐震性を確保することとなった。

工事は単年毎の発注となり、基礎工事は礎石を据え直し、木工事は古材繕いから補足材購入、新材加工、組立、造作まで全て完了した。左官工事は荒壁パネル組立と中塗り仕上げ（蔵部分）及び大津壁（浅葱）仕上げ（離れ部分）のうち、瓦工事に干渉する部分を除き施工した。次年度は瓦工事（補足瓦製作､葺き上げ）と左官工事の残り、建具工事、畳工事、土間叩きを行い離れ・蔵部分が完成する予定である。（結城　啓司）

遣り方を設置した基礎の状況

本年度竣工状況

県指定文化財　護国院開山堂ほかの保存修理

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：和歌山市紀三井寺
修理の種類：半解体修理、部分修理
修 理 期 間：2019.05 ～ 2021.03

大ばらし完了状況

本事業では県指定文化財の開山堂及び大師堂の部分修理、三社権現の半解体修理、本堂の須弥壇調整を行う。本年度は三社権現（白山妙理権現、熊野三所権現、金剛蔵王権現）と本堂の工事を発注した。

三社権現は蟻害を大きく受けており、倒壊寸前の状態であったが、屋根部分が比較的健全で覆い屋内にあることから分解せず、桁より上で大ばらしを行い、軸部の解体修理を行った。

3 棟は同規模、同型式で建てられているが、建立年代は詳らかでなく、これまで様式などから 17 世紀後半と評価されていた。今回の解体に伴う調査でも建立年代を確定する資料は発見されなかった。しかし、当初は現状と異なり浜縁、脇障子がなく、屋根勾配も現状より緩やかだったことが判明した。また、塗装も現状は垂木、裏甲、桁などの木口に黄土が、化粧裏板や壁板に胡粉が塗られているが、当初は飛檐垂木と裏甲木口などが墨塗の他は全て赤色塗装であることが判明した。また赤色塗装も現状では鉛丹系の塗装が塗られているが、当初と考えられる酸化鉄系赤色塗料の痕跡が確認できた。現状の塗装仕様に変更されたのは後述の昭和 27 年の修理時と判断した。

白山妙理権現は昭和 27 年に隣接する多宝塔がジェーン台風により倒壊して修理される際に同時に修理されており、大半の部材が取り替えられている。なお、修理は多宝塔の修理を手がけた選定保存技術者（建造物木工）の故松浦昭次氏が行ったことが判明した。同時期の修理としてコンクリート基礎が打たれており、白山妙理権現のみ土台下までコンクリートが廻り、その他は土台部分から外側で納まっていたことから、２棟は建物を解体せずにコンクリート基礎が設けられたことが判る。

工事の実施により白山妙理権現が当初の想定よりも蟻害が進んでいることが判明したことから計画変更を行い、施工範囲を増加した。併せてコンクリート基礎は近年に施工されたもので納まりが良くないことから、今回は撤去して基礎を旧規に復することとし、併せて基礎状況を確認するため発掘調査を行った。また、現状の建具は格子戸が嵌め殺しで入るが、２本溝の敷鴨居と合わないことから、引き違いの格子戸に復することとした。塗装の施工は次年度であるが、前述のとおり旧規の塗装が判明したことから、本来の塗装に復する予定である。　（結城　啓司）

修理前破損状況（熊野三所権現）

木部修理実施状況（工房での仮組）

県指定文化財　阿弥陀寺大師堂の保存修理

建 築 年 代：永正６年（1509）
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町南平野
事業の種類：屋根葺替・部分修理
事 業 期 間：2019.10 ～ 2020.03

建物および事業、業務、修理工事の概要

妙法山の中腹に位置する阿弥陀寺は、奈良時代に修行僧の道場として成立し、弘法大師空海が高野山を開く前年の弘仁６年（815）にこの地で修行し、山腹に堂を建て阿弥陀如来を本尊としたことを開基とする。

降雨の多い地域において前回の屋根葺替から 50 余年が経過し、雨漏りを生じるなど屋根面の破損が目立っていたため、県の補助事業として平成 30 年度に保存修理に向けた基本設計を行い、続く令和元年度に銅板屋根の葺替え等を行う保存修理工事を実施した。当事業においてセンターは工事の技術指導を行った。

保存修理の内容

工事は、建物の上方へ覆いを掛けた後、屋根面の銅板を解体し、雨漏り等で腐朽・劣化していた小屋組や野地を取替え、合わせて軒の補修も行った。軒廻りには建立時からの部材が多く残るものの、破損や強度の低下がみられたため、軒裏での補強策を講じた。木工事の後に銅板を葺直し、屋根上の鋳造製露盤の補修や外廻り建具の建付け調整を行って、工事を終了した。

事業中には、昭和８年に前面へ籠堂が付属される前の「方三間・宝形造・こけら葺」時代の様相について確認できた内容もとりまとめた。　　（下津　健太朗）

修理前の東面軒（雨漏りによる部材の腐朽・欠損）

鋳鉄製露盤と「永正６年」銘入りの鋳銅製宝珠

野地の補修（北東野隅木取替、野垂木添木）

東面軒裏での補強材挿入状況

修理後の東面軒（在来に倣い取替または補足した）

県指定名勝　藤崎弁天弁天堂の保存修理基本設計

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：紀の川市藤崎
事業の種類：基本設計
事 業 期 間：2019.04 ～ 2020.03

建物および事業、業務の概要

紀伊国名所図会にも描かれる藤崎の地は紀の川随一の景勝地であり、県の名勝に指定されている。その川辺に建つ弁天堂は、江戸前期の建立と見られる桁行三間、梁間二間の身舎に向拝がつく小規模な仏堂である。

幕末に琴の名手として知られた僧侶・古岳幽眞が居住しており、建物に残る修理棟札に記された万延元年（1860）の年紀や建物の主要部の様式から、この時期に大規模な改造が行われたものと見られる。

明治以降には外務大臣を務めた陸奥宗光の所有となった時期もあり、その後旧名手村（現紀の川市）に寄贈されて現代に至るが、沿革の詳細は不明である。

建物は比較的近年に桟瓦への葺き替えや床組、縁廻り、柱間装置が取り替えられているほか、内外装の全面塗装など大規模な修理が行われているが、蟻害が著しく、正面を残して屋根が軒とともに崩落し、その際に天井が全壊するなど重篤な破損状況となっている。

この事態を受け、紀の川市から名勝を構成する歴史的建物としての修復を前提とした建物の調査事業を平成 30 年度に受託したことに続き、具体的な修理計画を立てる基本設計業務を本年度で実施した。

天井の復原考察の様子

調査及び修理計画の内容

軒廻りなど崩壊した部材は一旦回収され、隣地に集積した上でブルーシートで養生されていたが、建物本体や改修部材を適切に保全するため、仮屋根や保存小屋などの仮設建設（別事業）の提案を紀の川市に行い、設計業務などに協力した。

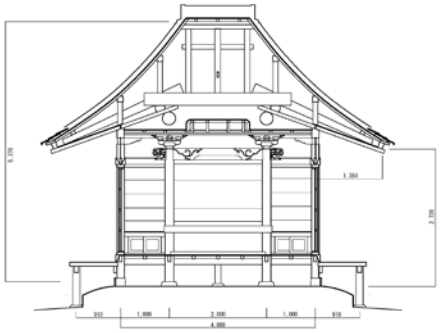
これら仮設物の完成後、建物の軒廻りなど詳細な実測調査を行った。また同時に部材の整理、分類を行い、全壊した天井や小屋組の復原考察を行った上で破損前の基本図を作成するとともに、構成部材調書を作成し、修理に際し必要な補足木材などの数量を積算した。

回収部材の整理時には、史的調査も併せて行い、棟束と見られる部材に釘止めされていた木札に、元禄 14 年（1701）の年紀が記されているのを確認した。同札は祈祷札と見られ、建物の建立時期を示す資料となりうるかを確定出来ていないが、札、束材ともに打ち替えの痕跡がないことから後世に取り付けられた物である可能性は低い。また、向拝や須弥壇廻りなどは絵様の特徴から万延期の改変によるものと判断出来るが、側柱の面幅や舟肘木は江戸前期の特徴を有しており、小屋組まで含めると主要な架構部に建立当初の状況が残されている可能性があると推測出来る。

現状では外壁が堅板張りとなっているが、背面の壁の内側などには 40㎝近い幅広の楠材の横羽目板壁が残存しており、県指定文化財歓喜寺下品堂（17 世紀後期・有田川町金屋）などと共通する特徴を有する。

基本設計は、工期 21 ヶ月程度の半解体修理として計画し、基本図や構成部材調書を元に積算を行った。

令和 2 年度より、県の補助事業として修理事業が進められる予定である。修理に伴う調査で建物の価値が明確になることが期待される。　　（多井　忠嗣）



桁行断面図

景観重要建造物　大福院本堂の保存修理

建 築 年 代：江戸時代（17 世紀後期）
所　在　地：田辺市湊
事業の種類：解体修理
事 業 期 間：2018.07 ～ 2020.03（修理期間：2018.07 ～）

本堂　竣工正面外観

建物および事業、業務の概要

国土交通省の「景観まちづくり刷新支援事業」によって、鬪雞神社周辺や JR 紀伊田辺駅前などで景観資源を活かしたまちづくりが進められている。「鬪鶏神社周辺の景観整備」の一環として神社境内に隣接する「大福院」にある本堂（平成 29 年 7 月、景観重要建造物第 1 号に指定）を文化財に準じた方法で修理を行った。平成 29 年度に復原調査と基本設計を行い、30 年度に実施設計と工事監理を行い、今年度は工事監理と付属棟の修理設計を行った。

大福院は熊野別当湛増の開創であるという。天正の豊臣氏の兵火で焼亡したが、寺蔵の寛永 7 年 (1630) の境内絵図には鬪雞神社の「別当本願坊極楽寺」として今の位置に境内を構えている。19 世紀に三宝院の末寺となるが、現在は小院として形を残すのみである。

本堂は小規模な寄棟造本瓦葺きの三間堂で、建立年代は向拝の虹梁絵様から 17 世紀後期と考えられる。一間の向拝を付け、堂内の前側奥行二間を外陣、後方を内陣としている。向拝の虹梁・木鼻以外に装飾的部材は一切なく簡素な堂である。もと蟻通神社の薬師堂であったと伝えられている。

本堂　竣工内部（内外陣境）

保存修理の内容

昨年度中に解体は終了し、昨年度末から部材の繕いと補足木材の加工を行った。６月には工場で小屋組の仮組を行い、７月にから現場での組み上げ作業を開始した。部材の繕いと併せて解体部材の再調査を行い、前回の変更設計案を見直した。当初は内陣厨子がなかったことが判明した。縁廻りや正面中央間建具の意匠を見直した。伝統的な工法による修理を行うことができたので大規模な補強金具が必要なくなった。などである。それに基づいて工事を続け、令和２年２月に工事は完成した。修理前の建物と大きく趣を異にするものとなり、内部はすべて板壁で、内外陣を結界で仕切り、閉鎖的な密教や修験の仏堂の趣となった。

引き続き、本堂東側にある地蔵堂・山門・行者堂及び鎮守堂の修理が行われている。景観に配慮して、トタン板の屋根を銅板葺きや瓦葺きに整備し、その他は現状修理としている。この工事を含めた「景観まちづくり刷新支援事業」に係る事業、駅前空間の景観刷新（アーケード撤去、アーチ看板撤去等、田辺駅前商店街の建造物の外観修景等）、鬪雞神社周辺の景観整備（参道の舗装の美装化、ポケットパークの整備等）なども５月末には完了する。　（寺本　就一）

付属棟　修理前４棟全景

熊野那智大社境内施設整備事業技術支援
熊野那智大社長生殿・手水舎等の保存修理

建 築 年 代：昭和
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
事業の種類：屋根葺替、塗装修理、部分修理
事 業 期 間：2017.10 ～ 2019.04（全体：～ 2020.03）

熊野那智大社は、熊野三山の一つである。嘉永４年から嘉永７年（1851 ～ 1854）にかけて建てられた７棟の社殿は重要文化財に、境内は史跡熊野三山に指定されており、世界遺産のコアゾーンとなっている。

神社では、御創建 1700 年記念境内施設整備事業として境内の建物の修理を行ってきた。昨年度までの拝殿の修理に引き続き、元年度は一の鳥居、二の鳥居、宝物殿、長生殿、絵馬掛、神馬舎、兒宮、手水舎（2カ所）、飛瀧神社の社務所、祈願所などの修理を行った。

修理は主に塗装の塗り替え、銅板屋根の葺き替え、それらに伴う木部の修理であった。木部修理は拝殿ほどの大工事とはならなかったが、高湿度による木部の腐食がほぼすべての建物に見られ、手水舎の柱の継木、祈願所の縁板の取り替えなどを実施した。この高湿度の気候は、塗膜の浮き上がりや染みなど塗装工事にも悪影響を与えた。雨漏り対策として宝物殿、鳥居では防水工事が必要となった。

これらの工事は神社が直接業者に発注を行っており、センターは作業の調整、工事範囲の協議など神社を手助けするマネージャー的な業務を行っていた。それぞれの業者・職人の協力により３月にすべての工事が完了したが、コロナウィルスの影響により竣工祭でのお披露目ができなかったのは残念である。

（寺本　就一）

飛瀧神社祈願所　竣工

那智の田楽伝承･活用等事業に係る設計監理
田楽舞台の新調

所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
事業の種類：新調に伴う設計及び監理
事 業 期 間：2019.05 ～ 2020.03（全体：～ 2021.03）

「那智の田楽」は熊野那智大社の例大祭（扇祭・火祭りなどとも呼ばれる）で奉納される民俗芸能で、昭和 51 年（1976）５月に重要無形民俗文化財に指定され 、平成 24 年 12 月にユネスコの無形文化遺産に登録された。那智の田楽は室町時代に京都の田楽法師が伝えたものといわれている。幾度かの断絶と再興を経て、明治時代に再度断絶し、大正 10 年（1921）に復興された。令和３年（2021）は大正の田楽復興 100 周年にあたることから記念行事が計画されており、その一つとして田楽舞台の新調が盛り込まれている。

今の舞台は製作から 40 年あまりを経ており、舞台には釘・かすがいが多用されていて毎年の組立・解体で木部がかなり傷んできている。そのため民俗文化財の伝承・活用等事業費国庫補助金を受けて、２カ年計画で舞台の新調を行うこととなった。

設計にあたっては、伝統的な工法での組み立て、コストダウンなどが文化庁から求められており、屋根形状を切妻に変更、旧舞台の床板再用、釘・鎹等を使用しなくてもよい構法の考案、などを盛り込んだ設計とした。元年度の作業は木材の購入と加工を行い、２年度は残りの木材の購入と加工、７月の例大祭終了後に取り外す旧舞台の床板や高欄を加えて新舞台を完成させる予定である。

（寺本　就一）

「那智の田楽」と舞台

南海道「兄山 (背山) 越え」ルートについて

はじめに

本年度の普及活動で開催したシンポジウム「南海道の原風景」では、南海道沿いの２つの峠越えの道が注目された。奈良県御所市と五條市の境にある「風の森峠越え」では、鴨神遺跡の道路跡の発掘成果が紹介され、南海道に先行する時期の、紀伊と葛城を結ぶ道の重要性がクローズアップされた。また、五條市と橋本市の境にある「真土山越え」では、大和と紀伊の境界が、尾根筋から川筋へと移動したことが紹介された。

これらの事例に対して、伊都郡かつらぎ町と紀の川市の境にある「兄山 (背山) 越え」については、シンポジウムで話をする機会がなかったので、ここで補足説明をしておくことにする。

紀伊の兄山 (背山)

兄山 (背山) は紀の川の北岸、伊都郡かつらぎ町と紀の川市の境にある標高 167 mの山である。万葉集では主に背山と記載され、妹背（≒夫婦）の情をうたう和歌が多数知られている。大化２(646) 年正月の「改新の詔」では、「紀伊の兄山」が畿内の南限とされており、古来より重要な地である。

兄山（背山）越えは、山の北側と南側を越える二つのルートが想定されている。シンポジウム資料中には南側ルートを掲載した地図があり、等高線に沿ってカーブを描きながら進んでいる。ただ、奈良時代の南海道は、これまでの全国での発掘調査事例から道幅約９mの直線道路であることが予想されることから、私は兄山（背山）山頂のすぐ北側を通過していく、谷筋を越えるルートが当初の南海道と考えている。この北側谷筋を超えるルートは歴史地理学者の足利健亮氏や長谷正紀氏らにより提唱されている有力な説であるが、一般に浸透するには至っていないようである。

兄山（背山）北側越えルート

兄山（背山）の東側は現在比較的広い平野部となっているが、南海道は紀の川の旧流路・氾濫原と丘陵地に挟まれたごく狭い段丘裾部を通過する必要があり、地形の制約を受けている。直線道路が想定される場所は現在の線路沿いであり、佐野寺跡や宝来山神社、「萩原駅」推定地といった場所の南側を通り、背山の東側に差し掛かる。現在の道はそこで二股に分かれているが、やや南へ向かう道を入っていくと背山山頂のすぐ北側に入る谷筋が見える。この谷筋は果樹園と藪で始まり、堤防とため池 (馬ケ瀬池・二又池) を経て竹藪へ続く上り坂となっている。しかし、水や盛土を除いて考えてみると、南海道の道幅が確保できる切通しとなっていることが分かるだろう。そして、盛土造成地を経て、竹藪とため池 (様甚池・地獄谷池) のある谷筋を降ると、西方・紀伊地域側の穴伏川沿いの平地へ抜けることができる。

兄山（背山）越えのすぐ東には南海道駅路の萩原駅屋推定地があり、西側には奈良時代の行幸で用いられた玉垣勾頓宮跡と鎌垣行宮の推定地がある。律令国家成立期の南海道を感じることのできる場所は限られており、時間がある方は一度歩いてみることをお勧めする。

将来、兄山（背山）越えの切通し部分と山麓部分で発掘調査を行えば、成立当初の南海道の跡が確認できる可能性もあるだろう。　（丹野　拓）

萩原駅推定地付近から背山を望む（東から）

南海道背山越えの想定位置

天路山城跡「土居」と周辺の石塔類について

はじめに

天路山城跡は、日高郡日高町津久野・比井地区にまたがる中世の山城跡である（註１）。近世に比井浦の沿革をまとめた『古今年代記』では、山城の詳細については記載がなく、全容は不明な部分が多いものの、これまで日高町教育委員会関係者や和歌山城郭調査研究会によって天路山城跡の縄張り図が作成されたことで、山頂部の主郭や曲輪、石垣の存在が明らかになってきた。また、山城を直接構成する施設以外に、主郭から見て南側にある山裾部には、比井地区の海浜部を見渡せる平坦部があり、地元ではこの平坦部周辺を「土居」もしくは「土居跡」と呼称している。この「土居」北端部に五輪塔が所在していることは知られていたが、周辺に新たな石塔類が所在することが明らかになった。

小稿は、天路山城跡の「土居」及びその周辺に所在する石塔類の情報を整理・紹介し、今後の調査・研究の一助とすることを目的としている。

１　「土居」について

天路山城跡の「土居」とは、山頂の主郭南側で、発掘調査が行われた曲輪が位置する尾根の先端、標高約16～18 m付近に位置し、南北方向に延びる長方形状の平坦部のことである。

白石博則氏の作成した縄張り図を参考にすると、この平坦部の面積は350～400㎡程度と推定できる。現在の比井地区海浜部から城跡の東側に位置する比井若一王子社付近の標高は約2.3～4.3 mであり、「土居」と呼称される平坦部は、比井地区の集落、特に南側の海浜部と湾内を見渡すことのできる高台上に位置していると言える。

天路山城跡「土居」と石塔類の位置

天路山城は、戦国時代に現在の日高郡を中心として勢力を誇った室町幕府の奉公衆、湯河氏によって築城されたと伝えられている。湯河氏の本城である亀山城と湯川氏館（御坊市小松原所在）が、山城と山麓に生活拠点として居館を構える根小屋式城郭である点を踏まえると、天路山城もまた、山頂の主郭と山裾部の生活拠点を兼ね備えた根小屋式城郭である可能性が高く（註２）、また、集落に比べ高台に位置する「土居」からは、湾内に侵入する船舶の監視が可能であったと考えられる（写真）。

近世においても、比井地区は廻船を中心に栄え、「比井廻船」として『古今年代記』や『日高郡誌』にその記録が残る。主に酒樽や各地の城米の輸送を担ったとされているが、天路山城機能時においても比井浦が海運の要所であったことは間違いなく、主郭・主郭南側の曲輪・「土居」は、いずれも湾内や沖合の紀伊水道を意識した構造であると言える。

土居南端から湾内を臨む（北西から）

２　土居周辺の石塔類

（１）土居北端の五輪塔

前述の土居は、現在草木が生い茂っているものの、北端に五輪塔が所在していることはこれまでにも紹介されており（註３）、天路山城に関連するものと考えられてきた。現在、野生動物等の活動により、五輪塔は崩れ、各部位が散乱している状況であるが、筆者が

土居北端の五輪塔（南東から）

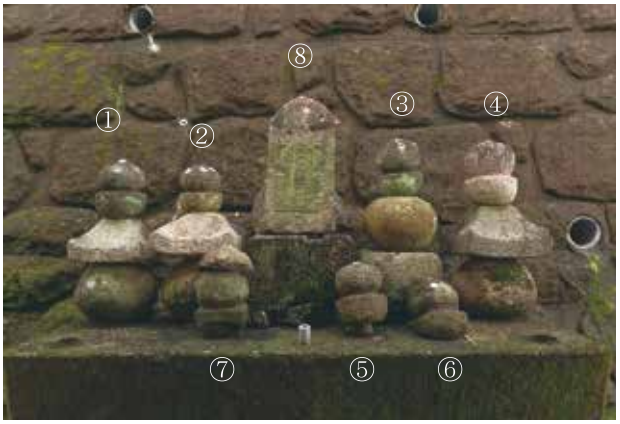
現地を確認した際には空輪と風輪、火輪が２個ずつ確認できたため、土居北端には、少なくとも２基以上の五輪塔が存在していたものと考えられる。

（２）土居北東部の石塔類

令和元年度に実施した発掘調査に関連し、土居周辺にこれまで知られていない石塔類が所在することが明らかになった。このため、令和元年 12 月２日、当文化財センター職員及び日高町教育委員会職員で周辺の聞き取り調査を実施した。

新たに確認した石塔類は土居の北東側（図②）にある民有地内に所在しており、住民への聞き取り調査では少なくとも 30 年以上前にはこの民有地内に存在していたとのことであった。その後、さらに筆者が聞き取り調査を行ったところ（註４）、過去の急傾斜地整備事業に関連して現在の場所に安置されたが、もともとは土居の東側斜面地にあって、整備事業に伴い落ちてきたと伝わっているようである。

この民有地内に所在するのは、組合せ式五輪塔（写真①～⑥）６基、一石五輪塔（写真⑦）１基、板碑（写真⑧）１基、計８基である。組合せ式五輪塔は、空輪と風輪の数から７基と考えられるが、多くは地輪や水輪が欠けており、また組合せについても、転落したものを住民が組み合わせて現在の形に安置したため、本来の組合せを維持していない。現在、板碑（写真⑧）の土台となっているものも、本来は五輪塔の地輪であると考えられる。一石五輪塔（写真⑦）は、火輪部分と水輪部分のみ確認したが、現状では天地が逆に安置されている。



土居東部の石塔類（南東から）

３　まとめ

山城跡やその周辺に五輪塔や墓石といった石塔類が所在する例として、周辺では湯河氏と同じく室町幕府の奉公衆であった玉置氏の本城、手取城跡での確認例が挙げられる。今回は、石塔類の詳細な記録・検討を行っていないため、その製作年代については戦国時代から近世初頭という推測の域を出ない。天路山城機能時に製作されたものであれば、文献上に記録が残っていない天路山城の築城年代を考える上で重要な手掛かりとなると考えられる。一方で、「土居」周辺には、江戸時代初頭に天路山城城主の元家老が、戦国領主としての湯河氏が滅んだ後、居を構えたとの伝承も残っており、天路山城機能時の五輪塔であるかについては今後も検討が必要であろう。　（濵﨑　範子）

（註１）令和元年度に実施した発掘調査については、本書の P. ６を参照のこと。

（註２）白石博則「報告②　湯河氏関連城郭と天路山城」『日高町歴史講座　湯河氏の城－その歴史と魅力－』2019 年３月

（註３）日高町教育委員会編「日高の文化財　特集古城館砦跡」第７号 1988 年及び註２、何れにも土居北端の五輪塔について記載されている。

（註４）令和２年４月５日に実施した。

平成 31・令和元（2019）年度の普及啓発活動

〇埋蔵文化財に関する普及事業

・シンポジウム・報告会
　和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」
　シンポジウム「南海道の原風景」
・歴史探訪
　「歩いて知るきのくに歴史探訪
　　～和歌山城とその周辺の文化財を巡る～」
・和歌山県内埋蔵文化財調査成果展
　「紀州のあゆみ」
・発掘調査現地説明会・現地公開
　「天路山城跡発掘調査」（＊）
　「里野中山城跡発掘調査」
　「和歌山城跡第 39 次発掘調査」（※）
　「田屋遺跡第 4 次発掘調査」
・「関西･考古学の日 2019」関連事業　スタンプラリー

〇文化財建造物に関する普及事業

・修理現場見学会
　「重要文化財　旧西村家住宅」
　「重要文化財　名手本陣妹背家住宅」
　「重要文化財　濱口家住宅」
　「国史跡　熊野三所大神社」

埋蔵文化財に関する普及事業

平成 31・令和元年度の普及啓発事業として埋蔵文化財関係では８件の事業を実施した。県内の各発掘調査現場において随時現地説明会･現地公開を実施した。

また、季刊情報誌『風車』の刊行の他、各事業において資料集やマップ等を作成し、参加者及び周辺自治体、研究機関等に配布し、好評を得た。

和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」

令和元年 7 月 13 日に和歌山県立図書館 (きのくに志学館)2 階講義・研修室において、前年度の埋蔵文化財調査の成果などを知っていただくため、和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」と題して開催した。参加者数は、89 名である。

発表は、「県内最大級の首長墓を掘る・54 年ぶりに開かれた横穴式石室―和歌山市　天王塚古墳の発掘調査―」瀬谷今日子氏（和歌山県立紀伊風土記の丘）、「中世熊野の港と倉庫群―新宮市　新宮城下町遺跡の発掘調査―」小林高太氏（新宮市教育委員会）、「近世の武家屋敷と古代の掘立柱建物群―和歌山市　和歌山城三の丸の発掘調査―」福佐美智子氏（（公財）大阪府文化財センター）、「和歌山城北側地域における土地利用の変遷―和歌山市　和歌山城三の丸の発掘調査―」川崎雅史（当文化財センター）、「熊野水軍の本拠・居館の様相―西牟婁郡白浜町　安宅本城跡の発掘調査―」佐藤純一氏（白浜町教育委員会）、「奉公衆山本氏の幻の舘―西牟婁郡上富田町　坂本付城跡の発掘調査―」田中元浩氏（和歌山県教育委員会）・小倉英樹氏（上富田町教育委員会）である。

また、誌上報告として 10 本の報告を加えた報告資料集を刊行して参加者にも配布した。

地宝のひびき　ポスター

地宝のひびき　開催風景

シンポジウム「南海道の原風景」

令和２年２月１日、シンポジウム「南海道の原風景」をイオンモール和歌山３階イオンホールにおいて開催した。参加者数は、122 名である。

文化庁文化財第二課の近江俊秀氏に「大和から紀伊への道」という演題で講演を頂いた。その他の発表は、「大和と紀伊の国境」大岡康之氏 (橋本市郷土資料館・橋本市あさもよし歴史館)、「南海道と古代の役所」冨加見泰彦 (当文化財センター)、「寺社からみた南海道～４つの地域の原風景を探る～」丹野　拓 (当文化財センター）である。また、最近調査の行われた関連事例について「紀伊国府推定地で見つかった大型掘立柱建物―府中遺跡第６次発掘調査―」として菊井佳弥氏（(公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）から報告を頂いた。講演および発表・報告後には、各発表者による討論を行い、古代の南海道の位置付け等について意見を交わした。

また、誌上発表として５本の発表を加えた発表資料集を刊行して参加者にも配布した。

シンポジウム　開催風景

『シンポジウム南海道の原風景　発表資料集』

歴史探訪「歩いて知るきのくに歴史探訪　～和歌山城とその周辺の文化財を巡る～」

令和元年 10 月 26 日、「歩いて知るきのくに歴史探訪　～和歌山城とその周辺の文化財を巡る～」を開催した。当日は 38 名が参加し、和歌山城整備企画課の北野隆亮氏による和歌山城二の丸での解説を始めとして、和歌山城とその周辺を「古絵図で歩く和歌山城周辺の文化財マップ」片手に歩いて見学した。

今年度の歴史探訪は、徳川頼宜入府 400 年を記念して、これまで発掘調査が実施された史跡和歌山城内の御橋廊下および二の丸、和歌山城跡三の丸、岡口門、移築長屋門、御作事所跡・石切り場（岡公園内）、刺田比古神社を巡った。歴史探訪の最後に巡った刺田比古神社では、岡本高比古宮司による神社の由緒や徳川吉宗公に纏わるお話しを頂けた。

「古絵図で歩く和歌山城周辺の文化財マップ」

職員による和歌山城跡三の丸の調査説明（一の橋にて）

和歌山県内埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ」

近年に県内で実施された埋蔵文化財関係の調査成果を県民等に公開することを目的に、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館、新宮市立歴史民俗資料館で巡回展示を行った。

考古資料を対象に展示を行った遺跡は、和歌山城跡、和田岩坪遺跡、田屋遺跡、東城跡、川辺遺跡、吉礼Ⅲ遺跡（以上、和歌山市）、湯浅城跡（湯浅町）、道湯川集落跡（仮称）（田辺市）、新宮城下町遺跡（新宮市）で、パネル展示として、根来寺遺跡（岩出市）における半地下式倉庫跡の型取り複製作業状況の写真も併せて展示した。

展示期間は、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館では令和元年６月１日～６月 30 日、新宮市立歴史民俗資料館では令和元年 10 月１日～ 10 月 27 日であった。また、来館者はそれぞれ 885 名、269 名であった。

なお、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館での展示期間中の６月 16 日に、紀伊風土記の丘主催の展示講座において当文化財センター職員２名が和歌山城跡と新宮城下町遺跡についての調査成果や出土遺物について紹介し、展示解説を行った。

紀州のあゆみ　チラシ（表）

紀州のあゆみ　展示解説リーフレット（表）

紀州のあゆみ　展示解説風景 (紀伊風土記の丘資料館)

発掘調査現地説明会・現地公開

遺跡の発掘調査を広く一般の方々に周知するため、発掘調査の現地説明会・現地公開を開催した。

各現場の発掘調査担当者による遺跡の解説を行い、地元の方を中心に多数の参加者を得ることができた。

現地説明会・現地公開を開催した遺跡と開催日及び参加者は、以下の通りである。

【現地説明会】

・天路山城跡　　令和元年 12 月 12 日　51 名
　＊日高町教育委員会主催

・里野中山城跡　　令和２年２月８日　　60 名

【現地公開】

・田屋遺跡　　令和元年６月 20 日　　34 名

・和歌山城跡第 39 次　令和元年９月 14 日　180 名
　※和歌山市産業局　文化スポーツ部　文化振興課
　（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団　埋蔵文化財センター主催

天路山城跡　現地説明会風景（＊）

里野中山城跡　現地説明会風景

田屋遺跡　現地公開風景

和歌山城跡　第 39 次　現地公開風景（※）

文化財建造物に関する普及活動

文化財建造物の保存修理現場や所在地において、所有者や地元教育委員会などの開催による現場見学会において解説を行うなどの協力を行い、修理を行った建物について関係者や近隣住民の理解を深め、今後の保全に向けての契機となるよう配慮した。

現場見学会（重要文化財　旧名手本陣妹背家住宅）

文化財関係者等の研修事業に協力し、和歌山県内における工事の内容や建物の特徴について解説を行った他、ヘリテージマネージャースキルアップ講習会（和歌山県建築士会開催）や、県内の教育委員会等主催の講演会や和歌山大学の地域文化に関する講座に講師を派遣するなど、文化財建造物保存修理事業に伴う調査成果などに基づいた知見を広く県民に還元した。

この他、県外の教育委員会や国際博物館会議などの要請に応える形で県内の文化財の見学会における解説を担当し、地域的な特徴や和歌山県に於ける保全に向けての取り組みなどについての広報に努めた。

現場見学会（国指定史跡　浜の宮王子跡　熊野三所大神社）

（公財）和歌山県文化財センター　平成31・令和元（2019）年度　概要

Ⅰ　受託業務

受託業務

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	4 件
埋蔵文化財出土遺物等整理受託業務	6 件
埋蔵文化財確認調査支援等受託業務	7 件
文化財建造物保存修理技術指導業務等	28 件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会	01.06.10	アバローム紀の国
評議員会	01.06.28	アバローム紀の国
理事会	01.11.29	アバローム紀の国
理事会	02.03.19	アバローム紀の国

調査指導

天路山城跡発掘調査で検出した遺構に関する評価について（天路山城跡本発掘調査業務委託）	01.12.05　水島大二（和歌山城郭調査研究会顧問） 於：天路山城跡発掘調査現地
新宮城下町遺跡発掘調査で出土した遺物の評価について（新宮城下町遺跡第 3 次出土遺物等整理業務）	02.02.06-07　伊藤裕偉（三重県教育委員会） 於：（公財）和歌山県文化財センター事務局整理棟
和歌山城跡発掘調査で出土した動物遺存体の内容と評価について（和歌山城跡第 1 次出土遺物等整理業務）	02.03.10　丸山真史（東海大学） 於：（公財）和歌山県文化財センター貴志川整理事務所

埋蔵文化財関係

近畿ブロック主担者会議等

令和元年度第 1 回 (第 59 回) 全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック主担者会議	01.05.24	主催：（一般）大阪市文化財協会
第 40 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会　総会	01.06.13-14	主催：（公財）山形県埋蔵文化財センター
令和元年度第 1 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	01.10.03	主催：（公財）八尾市文化財調査研究会
第 25 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック埋蔵文化財研修会	01.11.22	主催：（公財）和歌山県文化財センター
令和元年度第 2 回 (第 60 回) 全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック主担者会議	02.02.07	主催：（公財）大阪府文化財センター
令和元年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック会議	02.02.21	主催：（公財）八尾市文化財調査研究会
令和元年度第 2 回全埋協近畿地区コンピュータ等研究委員会	02.03.10	主催：（公財）八尾市文化財調査研究会（中止）
「関西・考古学の日 2019」スタンプラリー	01.07.20-11.30	主催：「関西・考古学の日」実行委員会 (全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック)

文化財建造物関係

平成 31 年度文化財建造物保存修理等監督者会議	31.04.11	主催：文化庁
平成 31 年度文化財建造物保存事業幹部技術者研修会	31.04.12	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会
文化財保存活用地域計画研修会	01.07.24-26	主催：文化庁
令和元年度文化財建造物保存修理関係者会議（第 65 回）	01.10.23	主催：文化庁
令和元年度文化財建造物主任技術者研修会	01.10.24-25	主催：（公財）文化財建造物保存技術協会

委員委嘱

村田　弘	紀の川市文化財保護審議会委員	31.04.01-02.03.31	紀の川市教育委員会
村田　弘	紀の川市名手本陣保存整備委員会委員	31.04.01-02.03.31	紀の川市教育委員会
川崎　雅史	御坊市文化財保護審議会委員	31.04.01-02.03.31	御坊市教育委員会
川崎　雅史	みなべ町文化財保護審議会委員	31.04.01-02.03.31	みなべ町教育委員会
川崎　雅史	坂本付城跡、竜松山城跡調査検討委員	31.04.01-02.03.31	上富田町教育委員会
結城　啓司	史跡金剛峯寺境内 (奥院地区) 大名墓総合調査委員会	31.04.01-02.03.31	高野町教育委員会

Ⅲ　講師等派遣・執筆など

埋蔵文化財関係

丹野　　拓	「岩橋千塚の築造集団」春季特別講演会	31.04.27	於：高槻市立今城塚古代歴史館
川崎　雅史	「和歌山城跡発掘調査の概要」展示講座「紀州のあゆみ」展	01.06.16	於：和歌山県立紀伊風土記の丘資料館
村田　　弘	「新宮城下町遺跡第２次発掘調査の概要」展示講座「紀州のあゆみ」展	01.06.16	於：和歌山県立紀伊風土記の丘資料館
村田　　弘	歴史探訪スクール　オープン講座「新宮城下町遺跡発掘調査の成果」	01.06.30	於:新宮市福祉センター　新宮市教育委員会・熊野学研究委員会
川崎　雅史	みなべ観光セミナー第１回「古代遺跡」「縄文時代～古墳時代までのみなべの遺跡」	01.07.16	於：みなべ町役場　みなべ観光ガイドの会
村田　　弘	新宮城下町遺跡調査委員会の開催に伴う協力	01.10.04	於：和歌山県立博物館　新宮市教育委員会
村田　　弘	「新宮津の地下式倉庫群」『発掘調査と保存修理から建物について考える』第 25 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋蔵文化財研修会	01.11.22	於：和歌山県立紀伊風土記の丘
濵﨑　範子	天路山城跡発掘調査による遺構や出土遺物の説明	01.12.12	於：天路山城跡発掘調査現地　日高町教育委員会
村田　　弘	和歌山放送ラジオ　つながるワイド　百の手習い・自然や文化財から学ぶ　「根来寺遺跡の展示施設について」	02.03.05	於：和歌山放送
村田　　弘	新宮市内中世資料調査に伴う職員の派遣	02.03.17-18	於：新宮市歴史民俗資料館他、新宮市教育委員会
川崎　雅史	「発掘で明らかとなった御坊の歴史」日高郷土学（第 14 回）例会	02.03.20	於：御坊市塩屋公民館　日高郷土学
村田　　弘	テレビ和歌山　６waka イブニング　和歌山の今を伝える「中世に繁栄した根来寺　遺跡展示施設プレオープン」	02.03.23	於：テレビ和歌山

文化財建造物関係

結城　啓司	「旧県会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡復元検討会議」指導・検討	01.05.10	於：旧県会議事堂整備事業地
寺本　就一	「竹内街道歴史資料館友の会バス見学会」解説　太子町教育委員会	01.06.15	於：護国院、根来寺、粉河寺
結城　啓司	「旧名手本陣妹背家住宅主屋の保存修理工事の現場説明」紀の川市教育委員会	01.07.15	於：旧名手本陣妹背家住宅
多井　忠嗣・結城　啓司	「令和元年度文化財建造物保存事業技術者養成教育第４回」（公財）文化財建造物保存技術協会	01.07.26	於：根来寺、旧名手本陣妹背家住宅、丹生都比売神社、金剛峯寺他
寺本　就一	「旧柳川家・旧谷山家の紹介及び解説」ICOM 京都大会オフサイトミーティング	01.09.05	於：和歌山県立紀伊風土記の丘
下津健太朗	「熊野三所大神社本殿修理現場公開」解説　熊野三所大神社	01.11.04	於：浜の宮王子跡
寺本　就一・下津　健太朗	「大福院の修理現場見学、鬪雞神社の修理計画演習」平成 31 年度ヘリテージマネージャースキルアップ講習会	01.11.09	於：大福院、鬪雞神社
大給　友樹	「重要文化財濱口家住宅一般公開」解説　東濱植林株式会社	01.11.16-17	於：濱口家住宅
寺本　就一	「たなべ　歴史町を歩く」解説　世界遺産鬪雞神社千六百年記念事業	01.11.17	於：鬪雞神社
下津健太朗	「熊野で過ごしてうれしかったこと―建築視点からもうかがえる熊野の魅力―」講演　環境問題研究会月例会	01.11.20	於：新宮市井の沢隣保館
結城　啓司	「文化財建造物修理における計画寸法決定プロセスー旧名手宿本陣名手役所を例にー」『発掘調査と保存修理から建物について考える』第 25 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋蔵文化財研修会	01.11.22	於：和歌山県立紀伊風土記の丘
結城　啓司	「国登録有形文化財めぐり」解説　国登録文化財公開事業	01.12.01	於：高野山霊宝館他
下津健太朗	「神倉小学校ふるさと学習」サポーター　ヤタガラス子ども未来プロジェクト	01.12.05	於：旧西村家住宅、旧チャップマン邸
下津健太朗	「旧西村家住宅修復完成記念プレイベント講演会・見学会」新宮市教育委員会	02.01.19	於：旧チャップマン邸、旧西村家住宅
下津健太朗	「熊野郷土学 2B」講演　和歌山大学	02.02.12	於:新宮信用金庫会議室、旧チャップマン邸他
結城　啓司	「旧名手本陣妹背家住宅ー修理事業の概略といくつかのトピックス」『文建協通信 138 号』01.10 発行		

Ⅳ　刊行図書・出版物等

年報

『公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2018』　01.05.31 発行

埋蔵文化財課関係

調査報告書

『天路山城跡ー比井漁港漁村再生交付金事業に伴う発掘調査報告書ー』（公財）和歌山県文化財センター　02.01.24 発行

『和田岩坪遺跡ー和歌山平野農地防災事業　名草排水機場建設工事に伴う発掘調査報告書ー』（公財）和歌山県文化財センター　02.02.28 発行

『祓殿石塚遺跡、湯川宿所跡、道の川集落跡ー熊野古道見どころ整備事業に伴う発掘調査・遺跡整備報告書ー』（公財）和歌山県文化財センター　02.03.27 発行

『立野遺跡ーすさみ町集合住宅建設に伴う発掘調査報告書ー』和歌山県教育委員会・（公財）和歌山県文化財センター　02.03.27 発行

『平成 30 年度　湯浅町埋蔵文化財調査年報　和歌山県有田郡湯浅町文化財調査報告書　第 1 集』湯浅町教育委員会　02.0330 発行

現地説明会・現地公開資料

「田屋遺跡第 4 次発掘調査　現地公開資料」　01.06.20 発行

「天路山城跡発掘調査　現地説明会資料」　01.12.12 発行

「里野中山城跡発掘調査　現地説明会資料」　02.02.08 発行

報告会・シンポジウム資料等

『和歌山県内埋蔵文化財調査成果展　紀州のあゆみ』展示解説リーフレット　01.06.01 発行

『地宝のひびきー和歌山県内文化財調査報告会ー』報告資料集　01.07.13 発行

『歩いて知るきのくに歴史探訪　～和歌山城とその周辺の文化財を巡る～』古絵図で歩く和歌山城周辺の文化財マップ　01.10.26 発行

『発掘調査と保存修理から建物について考える』第 25 回全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック埋蔵文化財研修会資料　01.11.22 発行

『シンポジウム　南海道の原風景』発表資料集　02.02.01 発行

『風車』紀州の歴史と文化の風　　文化財センター季刊情報誌『かざぐるま』

風車 86　2019 春号　特集「熊野地方における文化財建造物の修理について」　01.05.31 発行

風車 87　2019 夏号　特集「和歌山城三の丸の発掘調査」　01.07.31 発行

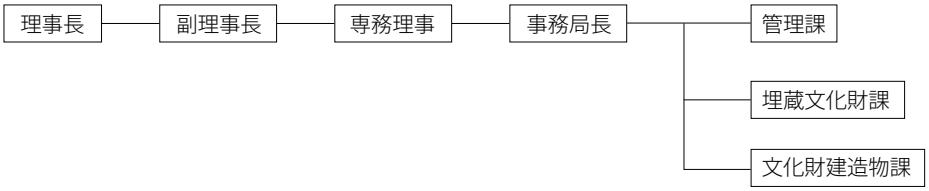
風車 88　2019 秋号　特集「旧名手本陣妹背家住宅の保存処理―現状変更と耐震補強―」　01.11.30 発行

風車 89　2019 冬号　特集「熊野古道見どころ整備事業」　02.02.29 発行

風車 90　2020 春号　特集「景観重要建造物　大福院本堂の保存修理」　02.03.31 発行

Ⅴ　組織

組織図



役員（理事）

理 事 長	櫻井　敏雄	元近畿大学　教授
副理事長	宮﨑　　泉	和歌山県教育委員会　教育長
専務理事	宮地　良治	前紀中県税事務所長
理　　事	逸木　盛俊	宗教法人粉河寺　代表役員
理　　事	小野　健吉	和歌山大学　教授
理　　事	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長
理　　事	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所　所長
理　　事	中村　浩道	和歌山県立紀伊風土記の丘　館長
理　　事	中村　貞史	元大阪経済大学非常勤講師
理　　事	林　　宏	元一般社団法人和歌山県文化財研究会会長

役員（監事）

監　　事	風神　正典	税理士法人・風神会計事務所　代表社員・税理士
監　　事	松本　泰幸	和歌山県教育庁　生涯学習局長

評議員

井藤　　徹	日本民家集落博物館　館長
岡本　邦敬	和歌山県立博物館　副館長
小野　俊成	宗教法人道成寺　代表役員
加藤　容子	元和歌山県教育委員
栗生　好人	和歌山県教育庁文化遺産課長
佐々木公平	宗教法人広八幡神社　代表役員
千森　督子	和歌山信愛大学　教授
日向　　進	京都工芸繊維大学名誉教授（01.06.28 ～）
南　　正人	和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
山陰加春夫	高野山大学　名誉教授（～ 01.06.28）
和田　晴吾	兵庫県立考古博物館　館長

職員

事務局長	井上　挙宏（管理課長事務取扱）
事務局次長	寺本　就一
管理課	
主任	松尾　克人
主査	出口　由香子
埋蔵文化財課	
課長	丹野　　拓
副主査	山本　光俊
副主査	村田　　弘
副主査	土井　孝之
副主査	川崎　雅史
技師	森田　真由香
技師	田之上　裕子
技師	濵﨑　範子
専門調査員	佐伯　和也
専門調査員	冨加見　泰彦
文化財建造物課	
課長	多井　忠嗣
副主査	下津　健太朗
副主査	結城　啓司
技師	大給　友樹
技術補佐員	松井　美香（～ 01.09.30）

表紙図案

表紙右上　新宮城下町遺跡　白磁四耳壺

表紙下　　旧西村家住宅主屋　東立面図
裏表紙下　　同　　桁行断面図

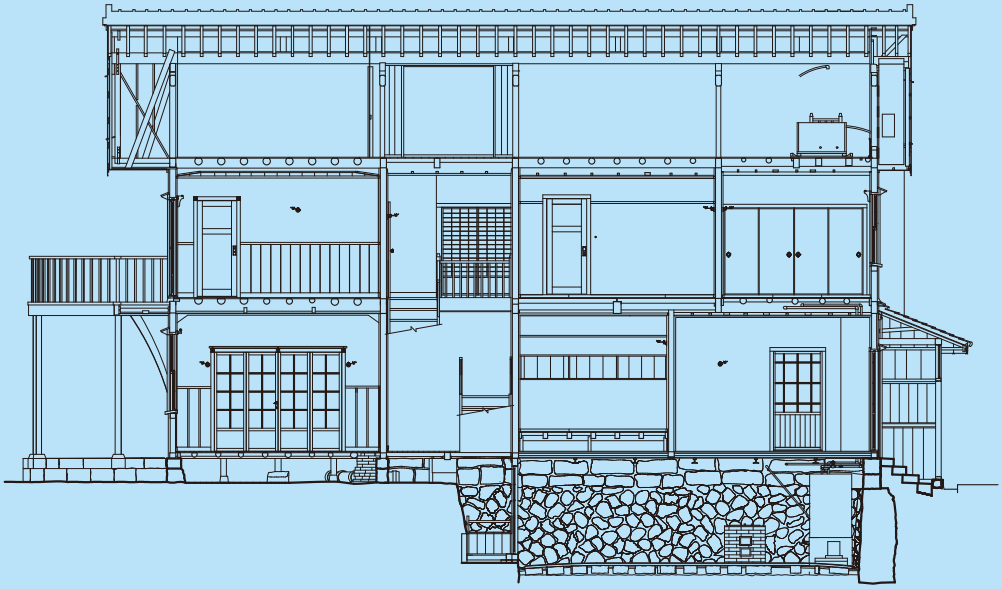
公益財団法人
和歌山県文化財センター年報
2019

2020 年 5 月 29 日

【発行】
公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1
TEL 073-472-3710
FAX 073-424-2270

http://www.wabunse.or.jp/
E-mail: kanri-2@wabunse.or.jp

【印刷】
白光印刷株式会社

（公財）和歌山県文化財センター
http://www.wabunse.or.jp